

# 日文研

2020年3月

no.64

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

日 文 研 六 十 四

二〇二〇年三月

国際日本文化研究センター



明智光秀図（マクラウド『日本古代史概説図解』1878年）

1878年に京都で刊行された『日本古代史概説図解』に WARRIORS と題する頁がある。そこには、武士の肖像画がずらりと並んでいる。今回の口絵を飾る「明智光秀」の肖像画もその中に見られる。光秀を描いたものとしてはあまり知られていない図版である（元は歌川国芳の武者絵）。同書は同年に長崎で刊行されたスコットランド人ニコラス・マクラウド著の『日本古代史概説』の付録本である。この付録本にはマクラウドが当時日本で収集した様々な図版が掲載されている。なお、本編の方は、日本人がユダヤ人の子孫であるという日ユ同祖説を最初に唱えた書籍として有名である。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインズ准教授）





光平有希 ジャポニズム楽曲探訪記

李 杰玲 登山のような富士山漢詩の研究

白石恵理 ビータがいた時間

古川綾子 ゆりやんレトリィバアとミス・ワカナ―魅力的な女性芸人について―

楠 綾子 中曽根康弘が語る戦後日本外交

吉村智博 差別問題研究の責任と主体についての雑感

稲賀繁美 Unique or Universal? 日本とその世界文明への貢献

―ワルシャワ大学日本研究創設百周年事業、招聘報告

細川周平 パリを退屈させなかった旗本

白 雲飛 センターの活動に関するエピソード

崔 吉城 朝鮮春画

木村立哉 阪東妻三郎から上海へ、共同研究「近代東アジアの風俗史」に参加して

井上章一 『希望の歴史学』を読んで想ったいくつかのこと

ジョン・ブリーン 二〇一九年日文研特別公開シンポジウム…

「天皇と皇位継承―過去と現在の視座」について

松田利彦 共同研究「植民地帝国日本における知と権力」あとがきのあとがき

安井真奈美 共同研究会「身体イメージの想像と展開」を立ち上げて

山田奨治 共同研究会「縮小社会の文化創造…個・ネットワーク・資本・制度の観点から」のこと

前川志織 展覧会「草の根のアー・ル・ヌーヴォー―明治期の文芸雑誌と凶案教育」を担当して

グエン・ヴー・クイン・ニュー ベトナムにおける日本学研究の現在

マルクス・リュッターマン 「思煩之時」―礼儀作法の歴史を文書から研究する意義について

村中由美子 「多文化間交渉における〈あいだ〉の研究」(通称〈あいだ〉研究会) レポート

エッセイ

## ジャポニズム楽曲探訪記

光平 有希

日本を題材にした音楽作品、いわゆるジャポニズム楽曲ときいて、皆さんはどのような音楽を想起されるだろうか。一九世紀末にイギリスやフランス、オーストリアで開催された万国博覧会では、日本の産業製品、美術工芸品などが多数展示され、これらの万博が西洋におけるジャポニズム進展の火付け役を担ったことはよく知られている。この流れは、他の芸術作品と同様に同時代の音楽作品にも大きな影響を及ぼし、二〇世紀初頭にはフランスの作曲家ドビュッシーの交響詩《海》や、イタリヤの作曲家プッチーニのオペラ《蝶々夫人》など、多数のジャポニズム楽曲が生み出された。これらの大型音楽作品は現在でも国内外で頻繁に演奏の機会を得ているものの、実は、万博を基軸にしたジャポニズム楽曲誕生より一〇〇年も前の一九世紀初頭から、西洋各国では日本を題材にしたピアノや歌による小品がまとまった形で多く出版されてきたことはあまり語られていない。

日文研「外書の研究」プロジェクトでは、日本を題材として作られた楽曲の楽譜資料も「日本関係欧文図書」のひとつとして位置づけ、数年前より調査と資料収集に着手。日本の幕末か



図1) 偽ベートーヴェン作曲  
〈ジャポニカ・ワルツ〉

3

ら大正期に該当する期間に西洋で刊行された作品、なかでも広く民衆に根付いた小品楽曲を主たる対象として研究を進めている。日文研所蔵楽譜のうち、古いもののひとつが一八一五年前後にロンドンで出版されたギルドン作曲のピアノ作品〈日本の調べ〉だろう。クラシック音楽史上の古典派全盛期に出版された本作は簡易なエチュード風に書き下ろされており、古典的かつ陽気な作風が愛されイギリスやアメリカで版を重ねた。同時代のオモシロ作品としては、かの有名な作曲家ベートーヴェンによる楽曲と騙った〈ジャポニカ・ワルツ〉(一八三〇年頃)が挙げられる。「ベートーヴェンも日本に着想を得て作品を残したのか!」と思わず顔がほろんでしまいそうになるが、残念ながら本作は、形式や作風、発表時期からも到底ベートーヴェン本人によるものとは考えにくい。これは、楽譜の大量販売を目標に据えた出版社が、買手の目を引くようにベートーヴェンの名前を附し、そしてキャッチーなテーマをタイトルに

据えて作品販売したものと思われる。当時、このようなケースは珍しいことではなかった。

それにしても、販売促進を念頭に置いた作品のテーマがなぜ日本なのか。一九世紀初期の西洋では、すでに「日本」「日本風」という言葉がそんなに浸透していたのだろうか。確かに、一九世紀ヨーロッパの新聞や雑誌では、「日本」に関する記事も多く目につくし、幕末から明治期にかけては芸人たちがオーストリアやイギリスなどの西洋諸国を巡業し、バラエティに富んだ日本風の興行



図2) フィッシャー作曲  
〈女軽業師ポルカ〉

タリズムのイメーシ形成の一端を担った。時期を同じくして《ミカド》の劇中曲を身近に楽しむためにアレンジされた小品も多数刊行された。そのうちのひとつが、〈ミカド・ポルカ〉(一八八五年)である。様々なバリエーションがある本作だが、日文研が所蔵しているのは、イギリスで軽音楽作曲家・編曲家として活躍していたブカロッシがピアノ独奏用に舞曲としてアレンジした楽曲である。〈ミカド・ポルカ〉が発表された一九世紀後期は、オペラやバレエの作品がしばしばピアノ連弾や

演目で現地の人びとを魅了した。その影響もあってか、一九世紀後半から二〇世紀初頭のジャポニズム楽曲では、単に「日本」を冠するだけではなく、興行師や軽業師をモチーフにした作品が多く作曲される。

また、「Mikado (ミカド)」というキーワードも見逃ごせない。この言葉を根付かせたのは、一八八〇年代に爆発的ヒットとなったサヴォイ・オペラ(サヴォイ劇場を中心に興行が展開されたコミック・オペラ)《ミカド》である。本作は、劇作家ギルバートと作曲家サリヴァンが組んだ作品の中で興行的に最も成功した作品であり、一八八五年三月一四日の初演以降、六七二回というロングランを達成した。当時のロンドンでは日本の風俗文物を見世物とした日本展が人気を博し、イギリスでは空前の日本ブームの真っ只中。日本風の登場人物たちが巻き起こすドタバタ喜劇を通して、当時のイギリス政府を風刺した《ミカド》はこのブームに乗じた作品である。同時に本作は、ジャポニズムやオリエン



図4) プカロッシ作曲  
〈ミカド・ヴァルス〉



図3) プカロッシ作曲  
〈ミカド・ポルカ〉

5

独奏のための舞曲としてアレンジされ、個人や小規模のサロンなどで身近にダンスを楽しむために用いられた。本作もその流れを汲むものであり、〈ミカド・ポルカ〉が作られた一八八五年には同じくプカロッシの編曲で〈ミカド・ヴァルス（ワルツ）〉〈ミカド・ランサー〉〈ミカド・クワドリル〉といった四形式の舞曲作品が発表されている。ちなみに、同時期にはイギリス以外でも〈ミカド〉にまつわる作品が多数輩出され、例えばフランスでは一八九八年にマルセイユに本社を持つフェリックス・エイドゥー社製の「ミカド石鹸」を買った人へ、リヨン出身の作曲家アーノードのピアノ作品〈ミカド・ポルカ〉がプレゼントされた。

これまで紹介したのはほんのごく一部の作品に過ぎないが、一九世紀末までに発表された楽曲の多くは西洋舞曲の形式が主流であり、今わたしたちが「ザ・日本の音楽」と感じるような特徴（たとえば、「ドレミソラ」で構成される五音階や、民謡などでよく用いられるビョッコ節のリズム）は、ほぼ皆無と言って良いほど描かれていない。例外的に、シーボルトが日本滞在中に採譜した音やメロディーをもとに編曲した曲集《日本の旋律》



図6) ディットリヒ作曲《日本楽譜》より〈落梅〉



図5) アーノード作曲〈ミカド・ポルカ〉

や、お雇い外国人として日本の洋楽受容に貢献したオーストリア人ディットリッヒが邦楽和声や邦楽器の音色を編み込み作った楽曲《日本楽譜》も存在はしている。しかしながら一九世紀に刊行された楽曲の過半数は、実際の日本、あるいは日本音楽に直接触れたことのない作曲家の手によって生みだされたものだった。だとすると、そこには彼らが思い描く「日本」のイメージというものが滲み出ているのではないだろうか。言い換えると、一九世紀後半にこそ「ミカド」や「興行師・軽業師」といったキーワードが定着していくものの、それ以前の一九世紀前半ベートーヴェンの時代に、楽譜販売促進の一役を担うと目された「日本」とは、当時の彼らにはどのような存在で、どのように映り、さらに音楽でどのように描こうとしたのか、そうしたことが作品や、楽曲の背景に迫ることで見えてくるのではないかと思うようになった。日文研所蔵資料との対峙を通じ、筆者の好奇心は日増しに掻き立てられ、さらに古い資料や基盤となる思想から、その問いの答えを追求したいという気持ちは膨らむ一方だった。

二〇一九年春・夏季。少しまとまった期間イタリアで調査をする好機に恵まれた。なぜイタリアなのか。それは、一六世紀以降、日本情報に精通したイエズス会の情報はイタリア



図7) 収集楽譜の一例

の都市ローマに集積され、キリスト教の布教に端を発して天正遣欧使節（一五八二年）や伊達政宗による慶長遣欧使節（一六一三年）など日本とイタリアの交流が戦国時代以来まで遡ることができること。また、一九世紀以降、ほぼ時を同じくして国家の統一を果たした両国が文化や産業を中心に様々な分野で友好を深め、その端緒のひとつとして一八七三年の岩倉使節団もイタリア訪問をしていること。このような複数回に及ぶ日本人の訪伊や古くから蓄積された日本情報が、長崎を題材にしたブッチーニのオペラ《蝶々夫人》成立にも繋がる、独自のジャポニズム楽曲形成地盤を古くから築いていたのではないか、そう考えたからである。

春の調査は事前調査と位置づけ、主に現地の図書館や音楽院で目録調査を行い、ジャポニズム楽譜や楽曲の分析に必要な一次史料分布を把握した。夏の調査ではローマ大学を拠点としつつ、ローマ、ナポリ、フィレンツェなどイタリア中・南部の音楽院や文書館に通い、資料収集と並行して各楽曲の分析に取り組んだ。また、休暇日には北部のブレッシャやミラノ、ボローニャなどにも足を延ばし資料を探した。いずれの場所でも、日本では想像だにできなかった

貴重な資料と遭遇し、各地が育んだ音楽のなかに息づく「日本」の姿を目の当たりにすることができた。

現地の音楽学・歴史研究者との深い交友から得た多くの学びや、今回収集した資料の詳細な分析結果は後稿に譲るとして、調査地では非常に楽しいトラブルの連続だったことを記して本稿の筆を置きたい。ある日、道に迷いつつ最寄りのバス停から三時間歩いて辿り着いた片田舎の教会文書館では、門前でおじいちゃんアーキビストが「ああ！東方から来たジャッポネーゼ！待ってたよ！」と抱擁しながら迎え入れてくれ、思わず泣きそうになった。また、とある音楽院附属図書館では何故だか楽譜のコピーを認めてもらえず、食事返上でひたすら五線譜に鉛筆で書き写すという修行に励んでいたところ、見かねた図書館の受付さんが連日オムレツを焼いて食べさせてくれた。このような温かい人たちに助けられながら、なんとか調査を終えることができた。この経験を糧に、なお一層、日文研所蔵ジャポニズム楽曲の研究探訪にもしっかり邁進していきたいと意気込んでいる。

#### 謝辞

二〇一九年八月・九月のイタリア調査は、人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラムの支援により遂行することができた。海外調査中、業務を引き継ぎ爾々と作業を進めてくれた「外書の研究」プロジェクトの同僚、そして現地で新たな資料を見つけるたび興奮気味にメールで報告する筆者に遠隔ながらも的確な指導をしてくださったクレインズ先生にもこの場をお借りして心からお礼を申し上げたい。

(人間文化研究機構・総合情報発信センター) 研究員 (人文知コミュニケーション) /

国際日本文化研究センター 特任助教)



## 登山のような富士山漢詩の研究

李 杰 玲

「日本人でないあなたが、なぜ富士山についての研究をするのか」とよく聞かれる。思い出すのは、私が富士山に興味を持った約一〇年前のことである。

私は中国で日本語を勉強し始め、富士山に関心を持ち始めた頃であった。「山」という漢字は、日本語で常に「やま」と読んでいるが、「富士山」の「山」は「やま」ではなく、「さん」という敬称と同じ発音であることに、深い興味を惹かれた。その時、富士山は日本での他の山と比べて、特別且つ人々に尊敬される山岳だという印象が残った。

富士山は日本文化において、どのような山なのか、という疑問を解明するために、日本語の勉強を続けるとともに、インターネットの記事や写真や教科書の挿絵など、富士山に関わる資料を収集した。中でも、富士山に関わる文学作品については特に注目してきた。

ちょうどその時、私は山岳の信仰と詩歌をテーマとして、博士論文を書いていた。私の研究は中国の山岳信仰から出発したが、富士山の信仰には中国の山岳信仰との共通点が多いことに気づき、両方の比較研究を考え始めた。二〇一一年に日本語を勉強するために大阪に滞在した機会を利用して、中国の図書館・資料館にはない富士山の研究論文や関連資料を多く入手できた。その頃の私は、富士山漢詩の研究にまだ着手しておらず、具体的な計画もまだなかった。しかし、富士山についての研究をよりよく知るために、ありとあらゆる資料をコピーしたり、

写真を撮ったりした。日本にある富士山関連資料は極めて膨大で、宗教や美術、文学など多岐にわたって富士山の姿を見つけることができた。

二〇一三年六月初旬、私は信州大学主催の東アジア名山文化研究会で発表した後、信州大学の案内で、研究会に参加した中国、韓国及び日本の研究員とともに、富士山を見学に行った。バスの窓から富士山の姿が見えたとき、研究員たちは揃って歓呼した。富士山を見たことがない私にとって、常に文学作品の中にあつた富士山は、突然、雪蓮花のように目の前に浮かび上がったのだ。今でもそのイメージは忘れられない。六月は富士山の山開きの前なので、富士山に登ることはできず、山麓で富士山を仰ぎ見るだけであつたが、将来いつか山頂まで登るという思いを心に秘め、富士山についての研究を決意した。

二〇一六年から二〇一九年にかけて、私は日本語教科書から見る富士山のイメージや富士山の信仰、更には江戸時代の富士山漢詩など、三点の論文を中国の学術誌で発表した。それに加えて、二〇一九年一月二四日、日本近代文学会、昭和文学会及び日本社会文学会合同国際研究集会で、私は富士山の漢詩と中国唐代の「詩聖」と称される詩人杜甫の名作「望岳」という五言詩について、発表した。もともと二〇一九年二月に、富士山に関しての数年の研究成果を集めた『富士山漢詩研究』という単著を黄山書社より刊行する予定であつたが、日文研に着任した後、図書館の富士山資料を調査したり、図書館の富士山古写真展示を見学したりした結果、新しい資料を見つけたため、原稿を再度修正し、出版を二〇二〇年春に延ばすことになった。

富士山と漢詩の繋がりには長い歴史がある。日本人は飛鳥時代、奈良時代の頃より、漢詩を作り始め、平安初期に於いて、隆盛期を迎え、江戸時代に入り漢詩の実を結んだ。それに応じて、富士山の漢詩が江戸時代では、頂点に至つた。柴野栗山の「詠富士山」などの代表作は現

在まで広く知られている（高柳光寿著『富士の文学』名著出版、一九七三年）。

富士山の漢詩を読むと、中国の伝統文化との関係を見逃すことができない。例えば、『竹取物語』から見れば、富士山の不老不死信仰は悠久の歴史があり、道教の神仙思想は富士山の漢詩にも影響を与えた。神仙思想というのは、凡人は修行を通じて、生老病死を越えて、永遠の命と神通力を持つというものである。従って、日本人の詩人によって書かれた富士山の漢詩には、不老不死の神仙思想が反映されていることが多く、特に山頂は神仙の場所と見なされ、『玉芙蓉』にたとえられてロマンチックに描かれている。他にも、富士山にまつわる物語が多く漢詩には取り入れられており、豊かな世界観や構想を形作っている。

ところで、二〇〇七年、富士山と中国の泰山は「友好山」になった。東アジアの二名山を比較することで、まだまだ多くの新しい研究が生まれると信じている。泰山は中国で最も有名な五つの霊山、五岳の筆頭で、一九八七年世界遺産に登録された。古今東西の泰山詩は約二万点がある（袁愛国編『全泰山詩』泰山出版社、二〇一一年）。富士山の魅力は、中国の泰山の魅力に通ずるであろうか、と私は数年前、富士山の本を読んだあとに、このような疑問を持った。満足する解答は現在もまだ見つからない。それでもなお、嬉しいことは、富士山漢詩の研究を初めとし、日本文学への理解が一步一步深くなることだ。富士山は中国の文学、道教、絵画と密接な関係がある。私は富士山の本を書いている途中、富士山は鏡のように、日本の文化、日本人の思想や審美感だけではなく、中国の文化をも映しているように感じた。富士山を思い浮かべると親近感が心から湧いてくる。特に、日本人が漢詩を用いて、富士山を詠じるのは、中国人の私から見れば、親近感が湧くだけではなく、とても理解しやすい。ちなみに、私は広州にいた時、富士山を想像しながら、漢詩を書いた。その詩は左記の通りである。

遙想富岳 富岳を遙かに思う

富士峰頭傲雪高、富士の峰頭は雪に負けず、高く聳えている  
 扶桑海上美名遙。扶桑の美名は遙かに遠い海上の国でも伝わる  
 初看白蓮點碧空、初見で白蓮のような富士山は青空を点綴する  
 恍若岱宗披玉袍。さながら岱宗みたいに玉の袍をはおっている

富士山は日本だけではなく、世界にも名高い山ということは言うまでもない、山頂の雪は夏でも融けない、それは富士山の清秀かつ俗に染まらない様子の象徴でしょうか、まるで白いドレスを着る岱宗のようでしょうか。

日本では千年以上の長さを経て、富士山に関する数え切れないほど多くの漢詩が詠まれた。霊山としての富士山は人間のように思考できるのではないかと私はしばしば思う。それについて、富士山自身は一言も言わない。詩人たちは富士山の代わりに、さまざまな感想を表し、それらは本当に興味をそそる。一方、富士山は詩人の作品をどう思うのだろうか、古今の詩人と同じ感想を持つのであろうか、それは永遠の謎のように、私の心の中に時々響いている。その響きとともに、富士山についての研究をはじめとし、日本文学の研究を続けたいと考えている。

数年間断続的に富士山にまつわる論文やレポートを書いているが、時々、様々な事情で、研究を続けることが難しくなる。一番の難関は資料が足りないということだ。中国では、富士山関連の資料が少なく、日本の論文、図書、雑誌や博士論文などが検索できるデータベース「CNKI」を利用できないために、先行研究は数点の論文だけであるのに対し、日本側の富士山

漢詩研究は多い。富士山漢詩の特徴（久保田淳著『富士山の文学』理想社、二〇〇四年）や漢詩における富士山のイメージ（上垣外憲一著『富士山―聖と美の山』中央公論新社、一九八二年）や江戸時代の政治の中心地と富士山漢詩との関係（池澤一郎著「漢詩に詠まれた富士山―京儒の場」『国文学解釈と教材の研究』四九巻二号、八八―九二頁）などの論説が挙げられる。このような多くの研究成果を前にすると、私は良い研究を出来るかどうか不安に思い緊張してしまふ。加えて、富士山に関する古典資料は変体仮名で書かれており、読みづらい。例えば奈良絵巻『富士人穴草子』などは今の私にはなかなか読み取ることができない。とはいえ、諦めるという気持ちは全くない。私のカウンターパートである荒木浩先生のご厚意により、大学院生の石原知明さんと虞雪健さんから、変体仮名の古籍の解説について、いろいろと教えてもらっている。富士山に関する論文や資料を調べるだけでなく、江戸時代の文学を研究するのに必要なくずし字や江戸仮名について学ぶことで、富士山漢詩の研究を進めることができるのだ。富士山の研究は想像より難しい。

私は、外国人研究員の一人として、一步一步、富士山登山のように、富士山漢詩研究の本を書いている。本を出版した途端、ホッとするのではないかと人々は想像するかもしれない。しかし、著書の出版で私と富士山との関係が終わるわけではない。著書の原稿が完成しても、或いは著書が刊行されても、私にとっては「ゴール」ではない。私の研究は富士山に譬えると、頂上に向けて、まだまだ長い行程があると悟っている。それゆえ、日文研滞在中、私は新しい研究テーマへのチャレンジとして、江戸時代の百物語について研究する。とはいえ、百物語への関心を持ったのも、富士山のおかげと言える。二〇一五年、私は日本国際交流基金の「日本研究フェロー」として、当時一歳の長女とともに、東京学芸大学で一年間滞在研究していたと

き、私は富士山と関係がある『竹取物語』を娘に読み聞かせた、その後、娘は日本の絵本がだんだん好きになっていったので、私は娘と一緒に、富士山の絵本をはじめとする様々な絵本をほぼ毎日読んだ。そうしているうちに、江戸時代の百物語を題材にした絵本が多いということがわかった。私と百物語との本格的な出会いはここからである。娘は百物語についての絵本が気に入り、私に何度も読ませた。それによって、私は古典文学と現代生活の關係に気づき、いろいろな発想を持つことができた。

私は日本での暮らしや古典籍調査や資料収集など、何にでも深い興味を持ち、何でも研究資料になると信じている。江戸時代の百物語を研究しても、近世文学の範囲に留まらず、現代の日常生活との繋がりを重視しつつ、継続的に研究をしていきたい。

（泰山学院特別招聘研究員／蘇州大学研究員／国際日本文化研究センター外国人研究員）

## ピータがいた時間

白石 恵理

海外の大学院で学び直そうと決めた時はすでに三〇歳を少し過ぎていた。大学を卒業以来、会社勤めの期間を合わせると一〇年くらいライター業を続けてきて、そろそろ自分の専門テーマと呼べるものを持ちたいと考えるようになった。過去にニューヨークで一年余りを遊び暮らした苦い経験から、今度はしっかりと脇目も振らず「勉強」しようと思いに決めた。美術史を選んだのに深い理由はない。展覧会めぐりが好きだった程度である。強いて言えば、大学時代に近代文学のゼミで講読した野間宏の『暗い絵』という小説が、ずっと頭の片隅に引っ掛かっていた。テキストそのものよりも、モチーフとなっているブリュッゲルの絵が気になって仕方なかった。そうだ、ブリュッゲルの作品を含む西洋美術史の基礎をヨーロッパで学ぼう。せっかくならブリティッシュ・イングリッシュにも触れよう。思い立ってすぐ、英国で美術史に力を入れているという大学院のいくつかに願書を送り、入学許可の返事もらったのが、東部のノリッジにあるイースト・アングリア大学（以下、UEA）だった。

九〇年代後半の、とある七月、留学先には日本人学生が山ほどいた。当時の社会情勢を反映してか、多くが開発学（Development Studies）や国際関係学（International Relations）、ジェンダー学（Gender Studies）等を大学院で学ぶことをめざしていた。美術史専攻志望者もほちぼちいた。秋から始まるディプロマ・コース（修士課程進学前の一年制準備コース）入学を前

に、われわれ留学生はまず、レベル別の語学研修を義務づけられ、同時にキャンパス内の寮生活が始まった。

一般の学生が夏休みで里帰りしている期間中、寮で生活していたのは日本のほか、ロシア、イタリア、スイス、トルコ、キプロスなど諸外国からの新入生のみで、ほとんどが学部を卒業したての二〇代初めの人たちだった。ディプロマのあと修士号を取った二年後には本国に帰ってどこかの企業に就職するか、英国で働く。そんな強い意思を持って、誰もが始めから猛烈に語学の勉強に励んでいた。それに比べ、わたしはというと、のんきなものだった。仕事を離れて勉強だけしていればよいという「学生」の時間に久々に舞い戻り、しばらく足が地面から数センチ浮かんでいるような気分だった。当時の日記を読み返すと、寮に到着した週の金曜日、「読書や朝寝をしてリラックス」とある。ほかに書いてあることといえば、「ティッシュの箱にある MANSIZE とは何か？日本のものと同サイズなのに「男もの」とはこれいかに？」だの、「大人が大真面目に『Lovely!』と口にする心がなごむ。気に入った」だの。「自炊用の鍋と食器をそろえるのに時間を費やした」あとは、「Sainsbury's という大型スーパーの品そろえはすごい」とか、「アメリカでは、四個セットで販売しているヨーグルトや卵を一個単位で買うこともできたのに、ここでは、切り離して買ってはいけないということを学んだ」云々。

ロンドンから特急電車に乗ると約二時間で到着するノリッジは、落ち着いた、されど活気のある美しい街である。一八世紀までは織物産業で栄え、ロンドンに次ぐ英国第二の都市だったという。大聖堂を中心とした市街地には、現在は博物館となっている城と壁と石畳が残り、一一世紀から一千年以上続くという市場も健在だ。その中心部からバスで一五分ほどの距離に、UEA の広大なキャンパスはある。敷地内には銀行 ATM や郵便局やクリニク、周辺に



は小さな食料雑貨店までとりあえずそろって、街へ出ずとも大抵の用は足りる。逆に言えば、キャンパスにこもっている限り、一般住民とのふれあいは皆無である。ノリッジ到着から一週間目で早くも寮生活が窮屈でたまらなくなったわたしは、秋から街なかへ引越す計画を立てた。

学内の住居あっせん所で見つけた貼紙をたよりに電話を入れ、その足で向かった先は、市街中心部のバス停から歩いて五分ほどの一角にあった。テラスド・ハウスと呼ばれる、長屋風に壁を共有して立ち並ぶレンガ造りの一軒で、可愛らしい二階家だった。

白髪で細身の婦人が、笑顔で迎えてくれた。あとで七〇歳と知ったが、信じられないほど若々しい。水色に白い小花模様がプリントされたローラ・アシュレイ風のワンピースが、瞳の色によく映えていた。ピンクや赤やグリーンの大ぶりの花柄クッションに、それとお揃いのソファカバーに、レースのカーテンに、立てて飾られた陶製のお皿に、銀食器。それこそ、*“Lovely!”*と声を出してしまいそうなほど、ロマンチックな室内に招き入れられ、緊張する。が、彼女は最初から、茶目っ気たっぶりだった。「コーヒーか冷たい飲み物はいかが？ ティーとは言わないでね。わたしの淹れるお茶はひどくまずいの」。正直で率直な人柄はその後の会話の端々にも感じられ、電話代以外の何もかもひっくるめて部屋代週四〇ポンド（当時六五〇〇円程）と聞いた瞬間には、間借りを即決していた。けれど、訪ねた一軒目であまりにもとんとん拍子に話が進み過ぎて、いささか不安にもなった。

「あのう、わたしは外国人で、日本人ですが、構いませんか？」そう聞くと、「あらっ」と微笑んで意外な答えが返ってきた。「わたしも外国人ですが、いいですか？ イングランド人じゃなくてアイルランド人ですけど」。

彼女の名前はピータといった。家族も友人も誰もがそう呼んでいた。本当はペトロニーラという少し長い名で、アイルランド特有のマックが付く苗字の人だった。ピータとの二人暮らしは、快適だった。引越した当日に、二階にあるベッドとデスクとチェストだけが置かれた、やはりラブリーな花柄の一部屋をあてがわれ、キッチンやバスの使い方を伝授され、英国式のホット・ボトル（湯たんぼ）を一つ持たされた以外、余計な干渉は一切なかった。わたしもその流儀に倣い、なるべく彼女の日常のリズムを乱さないよう気を付けた。と言って、会話がなかったわけではない。それぞれのお茶の時間や朝夕食の準備などで顔を合わせるたびに、キッチンでいろいろな話をした。友人との電話中にわたしの口から漏れる米語をあとで英語に矯正されたり、発音をさりげなく注意されたりすることもあった。

親しくなるにつれ、少しずつ自分の生涯について語ってくれるようになった。北アイルランドのベルファスト出身で、実家は商店を営んでいたこと。お父さんは、アイルランド独立運動を指揮して二〇年代に暗殺されたマイケル・コリンズの友人だったこと。ピータ自身は一〇代の頃にロンドンに移り住み、長じて結婚した相手は、某有名石鹸会社の社長だったこと。その後離婚することになり、三人の子どもを抱えてどこに行こうと途方に暮れた時、エイヤットと地団にピンを刺した先がたまたまノリッジだったこと。以来、市内では最も大きな病院で、院長秘書として定年まで働きながら子どもたちを育て上げたという。ピータは、ノリッジに住むアイルランド出身者で結成した「アイルランド人会 (Irish Society)」の元会長でもあった。

家には、いまは四〇〜三〇代となったピータの子どもたちが幼い孫たちを連れてよく遊びに来ていた。背が高くてハンサムな長男は消防署に勤めていて、阪神・淡路大震災の時にはレスキュー隊の一員として神戸に出動した経験を持つ。ほかに、アイルランド人会の人びとや、

地元の老人クラブの仲間など、ピータと同世代の友だちがひっきりなしに訪れては、シェリーグラスを片手におしゃべりに興じていた。(ちなみにピータは意外と酒好きで、夕食にはギネスビール一缶をお伴にしていることが多かった。)

忘れられないエピソードがある。ある朝、初めて見る年配のカップルがダイニングに腰かけ、ピータと語らっていた。近づくると、男性のほうの表情が少し強張った(ように感じた)。UEAで学んでいると自己紹介したところ、キャンパスへ行く途中に自分たちの家があると教えてくれた。わたしは簡単に挨拶を交わしてすぐに二階へ戻った。

二人が帰ったあとでキッチンに入ると、食器を洗っていたピータが話しかけてきた。「さっきの男性のアイバンがね、あなたに一つ言いたいことがあったそうんだけど、気分を悪くさせるかもしれないから言わなかったっていうの。それで、わたしが何?って聞いたらね、昔、四〇年代に、日本の捕虜収容所に入っていた時、ひどい仕打ちどころか、日本人にとっても親切にしてもらったということを伝えたかったって。本当はあなたと握手がしたかったって」。

そして、こう続けた。「この国でもし誰かに、日本人ということで嫌な顔をされることがあったら、アイバンのような人もいるということを思い出してね」。

エリザベス女王を訪問した日本の天皇の車列に向かって、数百人も元捕虜らが一斉に背中を向けて抗議の意を示した、と現地で報じられたのは、その翌々年のことだった。

わたしが沈みがちな時、ピータはよく「Are you lonely?」と声をかけてくれた。「もって何かしてあげられるといいんだけど、わたしじゃ限りがあるものね。年齢が違いすぎるから」という言葉を即座に打消し、悩み事を相談したものだ。話を聞き終わると、「This is a life, isn't it?」(これが人生よね)と必ず言い添えるのが、彼女の癖だった。そのように誰に対しても平

等に思いやる反面、本人自身は他人に甘えることを好しとしなかった。彼女が転倒して、片腕と片脚を続けざまに骨折したことがある。二階の寝室から階段をずるずると這い降りる姿を見ていられず、手助けしようとした途端、びっくりするほど強い調子で拒まれた。ああ、この人はそうやって生きてきたんだなあと思った。テレビドラマでも小説でも、血なまぐさいサスペンスとミステリーが大好きで、わたしが部屋にいるか確認したい時には、ドアの向こうで「クックー」とカッコウのような鳴きまねをした。

下宿生活は一年で終了を迎えた。西洋からアジアの美術に関心が移ったわたしが、転学のためロンドンに引越すこととなり、それをきっかけにピータも自宅を引き払い、郊外にある次女の家の離れに移り住むことになった。その後も二度ほど会いに行き、クリスマスの際に一〇年以上、手紙のやりとりは続いた。最後に手紙をもらったのは、彼女がかつて勤めていた病院のホスピス病棟からだ。ぶるぶるとした読みづらい文字で、自分以外の家族の近況が記されていた。

わたしがあの時の勉強の結果、いまこうして研究者の列の端っこにぶらさがっていることを知ったら、彼女は「これも人生ね」と、笑うだろうか。

(国際日本文化研究センター助教)

## ゆりやんレトリィバアとミス・ワカナ — 魅力的な女性芸人について —

古川 綾子

一〇代の頃に芝居とコントや漫才、落語を好きになって、公演チケットや関係する古書と雑誌、CDに小遣いとアルバイト代を費やした。高校二年の時、こまつ座の座付作家・井上ひさし先生にファンレターを出したら、数日後にとても丁寧な返信を頂戴した。芝居の感想についてお礼の言葉があり、「自分よりも素晴らしい作家が綺羅星のごとくいます。たとえば、樋口一葉、宮沢賢治、太宰治、室生犀星……」と作家の名前が列挙してあった。手紙の最後は、「どうぞたくさん本を読んでください」と結ばれていた。

高校卒業後は働くつもりでいたが、書かれてあった作家の作品をできれば全部読んでみたいと思い、このことをきっかけに進学を決めた。観劇のたびにファンレターを書き、何度も返信をいただき、好きな劇団や芸人さんも増えて、ますます演劇や演芸の魅力にのめり込んでいった。チケット代のためのアルバイトばかりして大学にはあまり行かなかつたが、そんな生活をもう少し続けたいという気楽な考えから大学院に進み、当時夢中だった桂米朝の著作をきっかけに上方落語の近代化に関する修士論文を提出して、以来二〇年、上方演芸・喜劇の近現代史を研究テーマにしてきた。

いまでも月に一〇数回は劇場や寄席に足を運ぶ。中川家の漫才や東京03のコント、吉本新喜

劇と松竹新喜劇、志村けんの座長公演、こまつ座と大人計画、劇団☆新感線、滝川シェークスピア、そして落語や文楽、歌舞伎など、毎週末どれかのチケットの先行発売があるため、土曜の午前中はなるべく仕事を入れず、必死になってチケットを獲得して、無事に確保できると無性に嬉しく、半年、一年後の公演を心待ちにしながら生活している。

二〇一九年の私的ベスト3は、一位・ゆりやんレトリィバァ JAPAN ツアー大阪公演（七月二日なんばグランド花月）、二位・松尾スズキプロデュース東京成人演劇部 vol.1「命、ギガ長ス」大阪公演（七月二九日 Iohai）、三位・ジャルジャルツアー二〇一九「元号みたいでんじゃねえよ」大阪公演（四月三〇日梅田芸術劇場シアター・ドラマシティ）とマツモトクラブの初単独ライブツアー「ジャンピング」大阪公演（七月七日 SPACE9）。とくに女性芸人「ゆりやんレトリィバァ」の二〇一九年の活躍は目覚ましく、芸歴二〇年目の友近とのユニット「ブルース・シスターズ」（大阪公演、一月一八日森ノ宮ピロティホール）でも五都市ツアーを成功させて話題を呼んだ。

芸歴七年目のゆりやんレトリィバァは、芸人養成所のNSC大阪校を首席で卒業後、キレのある動きを活かしたギャグと独創的な設定の一人コントで新境地を切り開いてきた。二〇一七年二月のNHK上方漫才コンテストでは女性ピン芸人初の優勝者となり、同年に始まった『女芸人Z。』決定戦THEW』でも六三六組の頂点に立って初代チャンピオンの称号を得た。二〇一九年六月、アメリカのオーディション番組『アメリカズ・ゴット・タレント』に出演した際も、奇抜な衣装で得意のダンスネタを披露しただけでなく、審査員の質問に英語でボケ続けて番組を盛り上げた。

二〇年ほど前からテレビに出演する女性芸人は増える一方だが、そのほとんどは女性タレン

トに転身してしまって、漫才やコントなどの芸（ネタ）を披露しつづける芸人さんは、海原やすよともこ、友近など、ごく限られている。どんな番組でも果敢にボケつつけて、貪欲に笑いをとりにいくゆりやんレトリィバァは、これまでにないタイプの女性芸人であり、今後ますます目が離せない。

芸風とキャリア、そもそも時代が違いすぎるのだが、独創的な笑いを生み出し男性芸人と対等に扱われ、人気を競い合った先駆者として、まず思い浮かぶ女性芸人といえば、漫才師のミス・ワカナ（一九一〇—四六）である。

一九三〇年代から四〇年代に活躍したミス・ワカナは、一五歳で島根から大阪へ出てきて河内家小芳と名乗り、漫才の初舞台を踏んだ。無声映画の楽士だった後の玉松一郎と大恋愛の末、一九二八年に結婚して、夫婦でコンビを組み、中国大陸を含む各地を巡業しながら漫才のテクニクを磨いた。一九三七年に吉本興行部にスカウトされて、漫才の本場・大阪の寄席に出演すると、瞬く間に売れっ子芸人の仲間入りを果たす。一九三六年の吉本興行部の専属漫才師は、エンタツ・エノスケ、アチャコ・今男、以下七三組で、ワカナ・一郎は七四組目のコンビとして専属契約を結んだ。当初はいわゆる“ドサまわり”の格下芸人として扱われ、一組目、二組目に出演する浅い出番だったが、わずか二カ月でトップクラス数組の漫才師と同じ出番が用意されるほど、短期間に頭角を現した。

二人の漫才の特徴は、女性上位のスタイルと、ワカナの“しゃべくり”のテンポ、さらに音楽的要素をふんだんに盛り込んだところにあった。体格がよくおっとりした雰囲気の一郎を、小柄で可愛らしいワカナが、上品から下品まで様々な言葉を緩急自在に操り、圧倒的な話芸をもってやり込めてしまう。最初から最後まで女性がリードする漫才は、当時の世間一般の男女



ミス・ワカナと玉松一郎のレコード「漫才 ワカナ放浪記」歌詞カード（ビクター 1939年）

の位置を逆転させた斬新なものだった。一九三〇年にエンタツ・アチャコが考案したしゃべくり漫才の特徴は、かみ合うようでかみ合わない、ボケとツツコミの会話の「間」のおもしろさにあったが、ワカナ・一郎はしゃべくり漫才に独自の工夫を凝らした。

簡単な読み書きにも不自由したワカナだが、どんな音楽も一度聴いただけで歌えるほどに音感が鋭く、天性の勘のよさにも恵まれていた。アコーディオンを抱えて舞台上に立った最初の漫



才師である一郎は、もともと音楽家志望であり、チェロやドラムを演奏するプロの楽士だった。歌をうたう漫才師はいても多くは音頭出身で、ビブラートがかかった音頭流の歌い方が一般的だったが、一郎に西洋式の歌唱法を学んだワカナは、アコーディオンの伴奏にあわせて謡曲からジャズまでなんでも歌ってみせた。また、はじめて洋服を衣装にした漫才師はエンタツ・アチャコだったが、女性漫才師ではワカナが一人目である。ドレスのような舞台衣装だけではなく、ツーピースなどの普通の外出着をおしゃれに着こなした点も新鮮だったという。ちなみにワカナの「ミス」は「miss」ではなく、「mistake」からとったシャレである。

二人の漫才はSPレコードで残っており、国会図書館の歴史的音源（国会図書館および歴史的音源配信提供参加館館内限定）として二七タイトル公開されている。また、一九三九年封切の主演映画『お伊勢参り』（新興キネマ京都／監督森一生／脚本依田義賢）にも短いとはいえず漫才を演じる場面がある。ワカナの考案したギャグでいまも使われているものは数多いが、品のよい言葉づかいで話していたのが、突如「ええかげんにさらせ」とか「なんぬかしてけつかる」と、ガラ悪く一転する落差ギャグと呼ばれるものがあり、ミヤコ蝶々や京唄子、現在では吉本新喜劇の未知やすえら、女性芸人に継承されている。

伝説の漫才師ミス・ワカナの波乱に満ちた人生は、舞台『おもしろい女』という作品によって、ある意味いまも語り継がれている。『放浪記』と並ぶ、名優・森光子の代表作『おもしろい女』は、一九七八年の初演から二〇〇六年までに森光子の上演は四六三回を教え、二〇一五年からは藤山直美の主演で上演されている。初演の舞台では、森光子と芦屋雁之助（玉松一郎役）が同時に文化庁芸術祭大賞を受賞しており、二〇〇四年には段田安則（玉松一郎役）が菊田一夫演劇賞、二〇一八年に文化庁芸術祭大賞、二〇一九年に芸術選奨文部科学大臣賞を受賞

するなど、数々の賞に輝いてきた作品である。

一九三九年、吉本興行部から新興キネマ演芸部に引き抜かれた直後のワカナ・一郎と、舞台で共演した、当時一九歳の森光子は、ワカナから「森みっちゃん」と呼ばれて可愛がられ、主演映画にも声をかけてもらったという。森光子の自伝からも、「映画を撮れば必ずヒット、舞台に出ればひと月満員で、高座もお客はびっしり。三回公演だと二回しか出ずに帰ることもありません。内心ずるいと思う人もいたようですが、そんな特別待遇が認められるほどの大スターで、まわりは始終びりびりしていました」（森光子『人生はロングラン私の履歴書』日本経済新聞出版社・二〇〇九年）と、ワカナが別格扱いのスターだったことがわかる。また、漫才についても、「男性優位の世の中で女性上位なのは漫才くらいでしたから、新鮮な驚きでした」、「毒舌のワカナさんは誇り高い天才でした。私は初めて漫才のすごさを知ったのです」と特筆している。

私が『おもしろい女』をはじめ観たのは、一九九八年二月の日生劇場での公演だった。修士課程に在学中の二四歳の時で、上方漫才の歴史について書かれた本の中でしか知らなかったミス・ワカナを、当時七七歳の森光子の身体を通じて知り、芸人としての「妻み（迫力）」に圧倒された。その後も、二〇〇六年四月の森光子の大阪公演と、藤山直美による二〇一五年六月の東京公演と二〇一八年十一月の兵庫公演を観てきた。実録物の演劇の魅力は、モデルの人物と演じる俳優とが、重なり合ってみえるところにある。戦後まもなく三六歳の若さで急逝したミス・ワカナだが、二人の名女優によって、上演のたびに現代によみがえり、稀代の女性芸人としていまも輝きつづけているように感じられる。

（国際日本文化研究センター助教）

## 中曽根康弘が語る戦後日本外交

楠 綾子

日文研創設を支援した中曽根康弘元首相（二〇一九年一月ご逝去）には、二〇〇九年三月からおよそ一年半にわたってインタビューをさせていただいた。外交史や国際政治学を専門とする研究者七名の共同プロジェクトで、二週間に一回ほどのペースで実施されたインタビューの回数は二九回に及ぶ。その過半は平河町の古めかしい砂防会館に構えておられた事務所の応接室で行われたが、夏には静養先の軽井沢の別荘にお邪魔し、おぎのやの峠の釜めし弁当をご馳走になったことが懐かしい。いずれも私には縁のない場所だと思っていたからたいへん物珍しく、自民党の政治指導者の生きる「空間」「空気」を少し味わったような気がする。

小泉内閣時代に引退を勧告され、衆議院議員の地位から退いていたとはいえ、半世紀以上の議員歴を誇る総理経験者として折々に発信しておられたところである。研究者を相手に毎回二時間ほどの時間を割いてくださったのは驚きであった。中島琢磨氏（現・九州大学教授）が事務所との間で入念に調整し、また事前準備を進めてくださったことも大きい。政治家・中曽根氏の歴史への責任感が長期間のインタビューを持続させたのかもしれない。彼は孫ほど年の離れた研究者たちに対して、横柄な態度をみせることはいっさいなく丁寧で、しかし威厳をもって接しておられた。毎回のインタビューの前にお送りする質問票や関連資料に可能なかぎり目を通しておられたことにも深い敬意を覚えた。プロジェクトの成果は、中曽根康弘（聞き手・

中島琢磨ほか)『中曾根康弘が語る戦後日本外交』(新潮社、二〇一二年)にまとめられている(以下、引用は本書より)。

インタビュアーでは、中曾根内閣期を中心にアジア・太平洋戦争後およそ六〇年の日本外交の諸問題が取り上げられた。そのなかでとくに印象に残っている氏の応答を三つ紹介したい。

ひとつは、彼が自分の体現した「新しい保守」——彼自身は「革新保守」を標榜した——は、岸信介などの「古い保守」とは明確に異なると認識していたことである。何が両者を分けるのか。そう問うと、一瞬の沈黙ののちに「古い保守は」洋服に染み付いたにおいのようなものだ」という反応が返ってきた。独立後の一九五〇年代前半、鳩山一郎や岸と中曾根は、所属政党こそ異なるが「真の自主独立」の回復を訴え、憲法改正・再軍備を主張した。保守のなかで吉田茂に対抗した勢力としてひとくくりにされることもある。当時の中曾根は、矢部貞治に共鳴して修正資本主義、協同主義に惹かれたことが示すように、鳩山や吉田の古典的自由主義に対してはやや距離感をもっていた。他方で、一九一八年生まれの彼は、大日本帝国のはじめた無謀な戦争に駆り出され、大きな犠牲を払わされた世代に属している。「押しつけ憲法」への批判的まなざしは共通していても、憲法の保障する自由民主主義の下で政治家として育った中曾根と大日本帝国の高級官僚であった岸との間には、越えがたい断崖が存在していた。その微妙な、しかし強烈な違和感を印象づけられたひとことであった。

第二に、非核三原則に対する見方である。核兵器を作らず、持たず、持ち込ませぬの三原則は、それぞれ岸内閣のころから個別具体的な問題に関連して国会質疑の場で表明されていたものの、日本政府の方針としてまとまった形で示されたのは、一九六八年一月の佐藤栄作首相の所信表明演説がはじめてであった。首席秘書官、楠田實の日記によると、当初は「作らず」

「持たず」の二原則の予定であったが、直前の閣議で運輸大臣の中曽根が「持ち込ませず」も盛り込むべきだと強く主張し、結果的に三原則が表明されることになったという（五百旗頭真・和田純編『楠田實日記——佐藤栄作総理首席秘書官の二〇〇〇日』一九六七年一月二六日条）。事実を確認し、理由を尋ねたところ、『後世に残り、国際的にも影響力を持つ佐藤首相の原則だから、とくに国会の所信表明で言う場合には、中途半端なやり方ではなくして、三原則で堂々とやったほうがいい』と佐藤さんに力説した」という。しかし、「持ち込ませず」を徹底することは現実にはきわめて困難で、事実、冷戦期は核兵器を搭載した米国の艦船が日本に寄港していた。日本政府の政策は非核三原則に反していたのではないか。

「非核三原則」は建前であってね、日本のそういう平和意思を世界および国民に知らせる、佐藤内閣のドクトリンを明示しているという意味があります。それと同時に、じゃあ現実はどうであるかと言えば、日本に入ってくるために、アメリカは核を太平洋のどこかで下ろしてくるなんてことはしないだろう。だから、現実的判断はそういう日本側の原則についてアメリカは従っているということ、異を立てない。そういうことではないかと思えます。（中略）原則を公にし国民に宣言しておくのは、政治的ジェスチャーとして有効であり、また必要なことだ」。

唯一の戦争被曝国としての意思を示しつつ、米国の核抑止力を損なうような行動はとらないことを、必ずしも不整合なものとして理解しない点に、中曽根氏のバランス感覚を感じる。折しも政権交代が実現し、民主党政権の下でいわゆる「密約」に関する外交文書が公開された時期であった。核を搭載した米国の艦船・軍用機の一部立ち寄り（トランジット）を事前協議の対象とするか否かをめぐって、日米間に共通の理解が存在しないことを外務省が一九六〇年代

には認識し、歴代政権に説明していた事実も明るみに出た。「こういう矛盾は、こと外交についてはあり得ることなのです。便宜主義と言われるかもしれないが、暗黙の了解で対米関係を上手く動かすべきだ。外交は生きているから、生きているものとして扱うのが政治家のすべきことだと、このような状態であることは是認していました」。開き直りかもしれない。それでも、なんとも含蓄のあることばである。米国に安全を依存せざるを得ないという厳然たる現実を受け入れながら、そのなかで「自主」をいかに追求するかを必死に模索した指導者のことばの重みと理解したい。だから、彼は非核三原則を、日米安保条約を早期に締結したことととみに日本外交の成功と考えるのであろう。今日では、「アメリカが核の問題を含めて、日本に対して非常に期待するのに対して、憲法九条に忠実にやろうとして、防衛の負担を免れ、国内的論議を避けようという政治的方策にもなった」という意味で、非核三原則が米国に対する予防線になったと意義づけるのである。

第三に、中曽根氏が戦後日本の政治家で吉田茂と鳩山一郎をもっとも高く評価していることである。吉田の外交政策を対米一辺倒と断じ、安全保障においては米国依存・軽武装の経済的功利主義に自主防衛の気概の欠如をみて批判する姿勢は、半世紀を経た時点でも変わらない。「吉田政治からの脱却」が彼の出发点であり、中曽根内閣の掲げた「戦後政治の総決算」はその完成形であった。それでも吉田を評価するのは、占領軍の支配という特殊な状況下で政治、社会と経済の安定を実現すること、サンフランシスコ講和条約・日米安保条約を結んで独立を回復することがいかに困難であったかを知るためであろう。

鳩山一郎については、鳩山内閣が憲法改正や「真の独立」体制の確立を掲げて「吉田政治からの脱却」をめざしたこと、結果として日ソ国交回復を実現したことを評価する。日ソ国交回

復は、中曽根氏からみれば「対米一辺倒の吉田占領政策を脱却し米ソ双方を意識した国際外交に転換」する意味をもった。当時の記録を読むかぎり、米国政府の鳩山政権に対する評価や態度は鳩山や重光葵外相に同情したくなるほど厳しく、いかにアイゼンハワー政権が日本の進む方向に不安をもっていたかがよくわかるが、米国は「自主独立」への欲求がもつ獐猛なエネルギーを恐れたのかもしれない。戦後日本のとり得た選択肢を考えるとという意味で、鳩山一郎とその政権をさらに研究する必要があると痛感した次第である。

中曽根氏が村山談話を評価していたことなど、注目すべき証言はほかにもあるだろう。他方で、焦点を外交・安全保障政策に絞ったこともあるけれど、自民党の熾烈な権力闘争に勝ち残った氏の権力政治家としての側面には切り込めなかったし、外交についても日米貿易摩擦など十分にお聞きできなかった問題もある。中曽根氏は、日本の政治家には珍しく精力的に回顧録を出版している政治家で、よく知られたエピソード、語られるうちに固定化した記憶を超えてどれだけ新しい事実を掘り起こすことができただろうか。そしてその心のひだをどれだけ抉り出せたのだろうか。『中曽根康弘の語る戦後日本外交』というタイトルどおり、あくまで中曽根氏が「語りたい」、あるいはそのように「理解してもらいたい」日本外交像を提示した可能性も否定できない。けれども、インタビュウの成果は近年の研究にしばしば引用されているし、新しい研究への刺激になっているかもしれない。わずかながらでも中曽根康弘という政治家とその思想や考え方、あるいは中曽根氏を作った時代に関する理解の深まりに貢献していることを祈るばかりである。

（国際日本文化研究センター准教授）

## センター通信

## 差別問題研究の責任と主体についての雑感

吉村 智博

差別と宗教との関係を学際的に探究する本共同研究（「差別から見た日本宗教史再考―社寺と王権に見られる聖と賤の論理」）は、これまで宿泊とフィールドワークをとともなう研究会を二度、所外で開催してきた。一度目は九州地方へ足を運び、二度目は東北地方へと出向いた。

二〇一七年一月二三日（オプショナルツアーとして一部の参加者は四日まで）、私たちは熊本に降り立った。前年に震災によって壊滅的な被害をうけつつも復興の途上にある熊本県益城町の被差別部落、ながく隔離政策に翻弄されなが

ら故郷から引き離されてきたハンセン病回復者が生活する国立療養所菊池恵楓園、戦前からの化学製品メーカーであるチッソが大量に垂れ流した有機水銀によって引き裂かれた静かな漁村だった水俣を訪ねるためである。益城町では移動のバスの車窓に広がる広大な空き地に震災の爪痕を見るときも、仮設住宅での生活の困難さと生活再建へ山積する課題に耳を傾けた。とりわけ障害者の日常生活の回復には多くの困難がともなうことも知った。菊池恵楓園では、隔離の象徴である園を取り囲む壁跡とハンセン病資料の数々に見入った。そして入所者が受け続けた熾烈な差別の実態に聞き入り、理不尽な隔離政策と患者の家族まで巻き添えにしてきた歴史的事実に怒りを覚えた。水俣では丘の上にある水俣病センター相思社で眼下に広がる水俣湾の穏やかな海面に目をやりつつ



展示を観覧しながら水俣病の歴史と現在について詳細な解説に耳を傾けた。

二〇一八年九月一五～一六日（オプショナルツアーとして一部の参加者は一七日まで）には、「三・一一」の傷跡がいまだに生々しい福島と宮城を訪れた。初日は、甚大な被害のあったいわき湯本の老舗旅館・古滝屋でご主人とご家族から当時の様子を聴きとりながら、震災の記憶を語り継ぐことの難しさを放射能汚染の問題とともに深く心に刻みつけた。翌日は、古滝屋のご主人の案内でバスをチャーターして被災地の現状を見て回った。国道六号を北上する移動のバス内でガイガーカウンターのメモリが時折激しく振れるのを確認しながら震災当時から時間が止まったままとっている富岡町、双葉町などをめぐりながら、多くの犠牲者を出した無数の痕跡を眼に焼き付けた。仙台方面へ向かう駅では途中でぶつりと途切れている常磐線の路線図を見上げながら日常生活への影響の多大さに改めて気づいた。仙台へ移動してからは支援と復興の今後について当事者の証言をもとにした討論をおこなった。さらに、仙台市の震災遺構（荒浜小学校や荒浜慈聖観音・慰霊塔など）や、名取市の閑上地区の現状を共同研究のメンバーの導きでつぶさに見学してまわった。

双方の研究会とも被差別当事者からの発話をうけて、短い時間ではあったが可能な限り議論を尽くし、積み残した話題については懇親会の場に持ち越され、時の経つのを忘れるほど真挚に意見交換した。普段は一日限りの研究会で終わってしまうメンバーの思考や意見をじっくりと聴く機会が得られたことは何ものにも代え難かった。

所外開催の場所をあえて被差別地域（あるいは被差別者のコミュニティ）や被災地に選定したのは、日本社会に内面化された差別問題を、今を生きる私たちが直面する現実に対応しつつ捉え直すことを目指すという共同研究の主題を所外において実践するためであったと私は考えている。差別というタームを主軸としながら、歴史、政治、宗教、文化、思想などそれぞれの専門分野（研究機関とは限らない）で思考し活動する共同研究のメンバーが、自身の学問的態度（学術的視座）や日常的営為についてその専門性をいかに越境しつつ交感しながら定直し直すことができるのかを問い直すものだったといえる。しかし、この問いへの答えはそう容易いことではないこともはっきりしている。いくら当事者の苦悩や呻吟や葛藤に耳を傾け、その社会的立場から発話される一言一言に共鳴しても、その営為が直ちに自身の立ち位置を転換する

ことにはならないし（その必要がないと認識される場合もあるし）、共有化された思想的課題がすぐさま共感をもって社会（世間）に受容されることも言い難いからである。それは日本社会のいたるところに差別の根源となっている権威主義や抑圧移譲が蔓延している現状ではなおさらである。

私自身のこと限定していえば、日常的に博物館での展示表象行為に関わるなかで、そうした困難さの経験を幾度となく繰り返してきた。いま、人文系・歴史系の博物館は、近代の日本社会で形成された秩序や機構によって必然的に生起してきた被差別当事者に対する抑圧・暴力・隔離などを伴う生存権の剥奪などの行為（歴史的事実あるいは史実）を「負の歴史」として捉え直し、展示対象と認識することが一つの潮流ともなっている。差別、病、公害あるいは戦争など人間社会が刻み続けてきた「負」の側面をクローズアップし、常設展示ないし企画展示によって公開される機会が増えてきた。博物館が自明視してきた社会像・世界観をいったん留保したうえで相対化し、被差別当事者の生活誌に思考の機軸を移行することが求められ、博物館を発話主体として確立するための関係を取り結ぶ「他者」を組み込むことが模索されているともいえる。

しかし、博物館は、ある特定のコンテクストに置かれ文字や映像として記録された資料（モノとも）の証言力を通して、来館者の想像力と洞察力に働きかけ、そこから普遍的な記憶を創造しようとする場である。ゆえに、特定のテーマに特化しようとするれば、常に当該問題の固有なリアリティを捨象して、問題の一般化ないし記憶の共有化につながる問題の普遍性を展示することになる。被差別当事者の語りや個々の経験は全体像の部分として後景に追いやられてしまいがちである。言語論的・物語論的転回以降の人文系・歴史学の世界では構造主義の後景に追いやられていた「主体」の復権（バーソナル・ナラティヴなど）に回路が切り拓かれたとはいえ、展示を観覧した人びとは、その問題の構造的背景を知見として得たいと要求するわけで、ここに展示する側とのギャップが生じる。

一方、差別問題の研究では、被差別当事者の思想や意向が強く反映されすぎてしまい、叙述する主体が過度に自己の態度を抑制してしまうこともある。この点もまた私自身が深く関わってきた部落史に限られたことにはなるが、研究のなかには性急で短絡的と思われるものや、無理な解釈（自説の都合に合わせた強引な文献や絵図の理解など）による唐突な議

論が、人権啓発や人権教育といった「名分」をまといながら一部の人がとの間で共有されている。残念なことだが、学術的考究よりもイデオロギーが先行する深刻な事態が、まだ部落史には存在しているのである。こうした動向は実証的な論考によって乗り越えるしかないのであるが、部落史の深化を阻害するような研究が散見されるのが現実である。

かつて社会学の領域から提唱された複合差別論は、差別／被差別の関係を相対化し、「すべての被差別者の連帯」との理想主義が差別を隠蔽する効果をもたらすことを鋭く指摘した。しかし半面、すべての差別問題は当事者の言語によって定義され構成されるほかない、とする当事者概念の限界もあって、被差別当事者の主張がそれだけで正当性をもつわけではない、との批判を生み出した。過度なアイデンティティ・ポリティクス依存への警鐘であったわけであり、現在にもなお有効な指摘であろう。

展示にせよ研究にせよ、被差別当事者を対象として認識し表象する行為をおこなおうとする者（研究者や学者とは限らない）には、あらゆる困難さをすべて引き受ける責任がともなう。叙述や表象の過程で浮上するであろう多岐にわたる課題に対する真摯な姿勢と総合的な判断が要求される。それ

は、安易な同調や冷徹な分析といった行為とはおよそ無縁なものである。責任と判断を全うしうる姿勢を保持する主体的な営みを持続するためにはどのような立ち位置にあり、かつ自身の言葉や表現によって差別問題への関心をいかに引き出すことができるか、私自身つねに問い続けている。被差別当事者の個々の語りや表現を社会の構造や機能の問題だけに回収するのではなく、かといってベッタリと寄り添うかの如き安易な同調（代弁行為）でもない態度とは何か。このことを自問自答するたびに、責任ある主体とは何か、という根源的な問題にぶつかっているというのが、偽らざる私自身のいま現在の心境である。

本共同研究の成果は、近々、複数の巻からなるシリーズ本として世に問われることになる。直接のテーマである宗教あるいは差別に高い関心をもつ人びとのほかに、多様な角度から当該問題に関心をもつ人びと、あるいはキーワードこそ既知の事柄に属するものの初めて本格的に考察してみようとする人びと、あらゆる層の手に届ける書物となっていく可能性を大いに秘めている。その成果が豊穡なものとなるかどうかは、ひとえに私を含む共同研究の参加メンバーが引き受けた解釈と思考の責任に対していかに向き合ってきたかに

かかっているであろう。

(国際日本文化研究センター客員准教授)

二〇一九年度共同研究員)

## Unique or Universal? 日本とその世界文明への貢献 —ワルシャワ大学日本研究創設百周年事業、招聘報告

稲賀 繁美

一、  
ポーランドは本年、日本との国交樹立一五〇周年を迎え、関連行事が目白押しだった。筆者も本報告に先立つ五月には、現代美術の日本とポーランドとの交流の一環として「直筆」と題された会合への参加を要請され(七月一〇—一二日、ワルシャワ・ポーランド建築アカデミー)、両国の藝術家たちに交じって、一服の講演を行った。それから三カ月後の一〇月二三日—二五日の日程で、今度はワルシャワ大学で表記の国際研究会が開催された。主催責任者の Agnieszka Kozłta 教授からの要請を受けた筆者は、全体講演の一環を

担う役回りとなった。あくまで個人参加であり、もとより国際日本文化研究センターを代表する立場ではなかったが、今回の催しは、日文研の国際研究協力事業とも無縁ではない。本来ならば、日文研を代表できる立場の方が参加してしかるべき行事だったことを、冒頭にひと言お断りする。

初日の開会式は、大学本部構内の由緒ある古図書館を会場とする。まず、ポーランドと日本との学術交流に関する著作で国際交流基金賞を受賞した Ewa Palasz-Rutkowska 教授が、自著に基づき、多くの秘蔵写真を映写しつつ、ポーランドにおける日本学の沿革から今日に至る発展を回顧した。Bogdan Richter (1891-1980) によって日本語講座が開設されたのが一九一九年。その後、第二次世界大戦を経た一九五二年、Wiesław Kosiński (1915-2005) が中国学科内で日本研究を開始する。七五年には日本研究と中国研究を束ねる形で極東学科が設立され、一九九〇年にはワルシャワ大学東洋学研究所日本韓国学科へと改組される。二〇一五年には同大学東洋学部日本語科となり、学科長に就任したが、日文研にも客員研究員としての滞在経験のあるコジラ教授である。

関係する学者のなかでもコタンスキは一九三〇年に日本研究を開始し、五二年からは日本学専攻の修士課程指導の権限

を獲得し、現在に至る多くの人材を養成した。『古事記』ポーランド語訳をはじめ、『万葉集』と題する日本古典文学選は、入門書としても貴重な貢献をなしてきた。日文研は創設準備の段階で梅原猛準備室長がポーランドを訪れた際、コタンスキ教授とも意見を闘わせている。日本の国学の伝統を受けて独自の見解を持つに至ったコタンスキは、梅原氏とは古事記の神名解釈では折り合わなかったが、両者の知的な信頼関係については、会議でも特段の言及がなされ、東京大学や北海道大学などから派遣された先生方と並び、国際日本文化研究センターとの強い絆も強調された。中西進教授、鈴木貞美教授などの末席に、聊かならず場違いにも不肖当方の名まで言及されたのには驚いた次第である。

古代日本史や考古学を担当した Jolanta Tubielewicz (1932-2003)、中江兆民研究で博士号を取得し『方丈記』研究でも知られる Krystyna Okazaki (1942-2008)のおふたりはすでに物故されたが、当日は、安部公房や大江健三郎とも交友があり、日文研にも滞在された Mikolaj Melanowicz 先生がお元氣な姿を見せ、完璧な日本語で回顧談を披露された。メラノヴィッチさんはクラクフのヤギェウォ大学に日本学科を立ち上げた立役者でもある。かつて講演のため列車でクラクフま

でご一緒した経験もあるが、さてあれは何時のことだったか。日本から派遣された歴代の講師には米川和夫、工藤幸雄など翻訳家としても著名な名前が連なる。また敵戒令下で勤務した吉上昭三を慕う声も多く聞かれた。だがとりわけ当日は一九七〇年より長年当地で教鞭を採っている岡崎恒夫先生の功績を称える席となった。折から『ウルシヤワ便り』が未知谷から刊行された。NHKラジオ深夜便「ワールドネットワーク」で知る人ぞ知る長寿番組、ポーランドからの報告のうち、二〇〇八年からの一〇年分全一〇九回をまとめた出版であり、巻末には、今回も招待された沼野充義先生との対談もある。岡崎先生は旧奉天のご出身で、大陸育ちに関する会話を交わせたのは、予期せぬ収穫だった。

## 二、

最初の講演はその沼野充義さんによる「佳人たちの奇遇」あるいは *Strange Encounters of the Two "Beautiful Ladies"*。ポーランドと日本それぞれの文学を「佳人」に譬えての英語での談話だった。相互の翻譯史に精通した論者ならではの総合的な鳥瞰。洋の東西を舞台に波乱万丈の冒険恋愛政治絵巻を描く東海散士の原作では、「波蘭ハ威名欧州ヲ振動シ牛耳

ヲ取テ四隣諸邦ヲ朝ゼシメシモ、物換リ星移リ国政萎微遂ニ亡滅ニ至レリ」とある。同様の亡国の憂いは軍歌「波蘭懐古」にも残る。「淋しき里にいでたれば／此処は何処と尋ねしに／聞かも哀れやその昔／亡ぼされたるポーランド」。講演は二葉亭四迷（一八六四—一九〇九）とBronislaw Pilsudski（1866-1918）の交流へも展開する。アレクサンドル三世暗殺計画に連座し樺太に流刑となったピウスツキは、アイヌ、ギリヤーク、オロックなどの民俗資料、写真・音声資料を多量に残した人物である。筆者はこの話題を奇貨として、『佳人の奇遇』は梁啓超が漢訳したものがヴェトナムでチュノムに訳され、越南の国民文学に収まったという裏話を紹介させて頂いた。亡国の悲哀と独立回復への悲願が、あるいはポーランドとヴェトナム両国に共通した運命でもあった。

午後には三篇の特別講演が続く。まずは関口時正・東京外国語大学名誉教授による英語講演。On Some Advantages of the Cumbersome Japanese Language in Appreciating and Nourishing World Literature. 日本語は漢字にひらがな・カタカナと三種類の文字表記があり、また漢字も音訓の使い分けが面倒で、規則などないに等しく、用法を個別に丸暗記するしか対応策もないに等しい。取挙げられた例が傑作だった。

「生、ビール、生きる、生まれる、生活、一生」が読めるのはさしずめ修士レヴェルの条件。「生い立ち、生える、芝生、生真面目」となるとプロ級だろうが、さて「生業、生憎、今生の暇乞い」となると、日本人でも若い世代にはお手上げだろう。だがこの厄介を逆手にとると、外国文学の日本語への翻訳は意外な効能を発揮する。その具体例として関口先生は、二〇一八年度第六九回読売文学賞を受賞して話題となったボレスワフ・プルス作『人形』を例に取る。原題は『Lalka（ラルカ）』だが、世代を異にするイディッシュ語使いの登場人物たちの破格のポーランド語を微細に訳し分けるには、英語などよりも日本語のほうがはるかに柔軟性に富む。絶妙の翻訳ぶりには、会場から喝采や笑い声があがった。格調たかい英語も逸品の語学の達人は、最近の趣味とおっしゃるハンブルクとの比較にまで話題を広げ、聴衆ともども賛否両論に花が咲いた。

雑談では、当地にも招待された平野啓一郎の『葬送』（二〇〇二年）が話題となった。関口さんたちは『ショパン全書簡1816〜1831年 ポーランド時代』（岩波書店、二〇一二年）に続く下巻も翻訳中だが、これは平野の小説執筆時期には、残念ながら間に合わなかったらしい。ショパン

はジョルジュ・サンドへのフランス語書簡にEではなく  
Joueを使ってゐるが、その男女関係の含意は？またその語  
感をどう日本語に移したのか苦労した、といった舞台裏を  
伺えたのも貴重だった。

三人目の特別講演は、渡邊秀夫、信州大学名誉教授。国文  
学畑だが、信州大学とワルシャワ大学との交換協定の初期か  
ら尽力された方である。「かぐや姫と浦島―漢文文化と日本  
文化」と銘打ち、ポーランド語も完備した映像資料併設の日  
本語講演である。ご講演のあと私的に、かぐや姫の「きと影  
になりぬ」は見えなくなったのか、それとも影とは光の意味  
か（田中貴子説）についてご見解を伺ったが、語彙論的にこ  
こは「不可視」でよからうとのこと。また「かぐや姫」はウ  
ラーミル・プロップの類型学分類にいう「求婚譚」とは結  
末が合致しないというツベタナ・クリステヴァの見解をめぐ  
ぐるの議論などにも、花が咲いた。「浦島」は明治期にな  
ると例えば山本芳翠がフランス・アカデミー仕込みの油彩画  
にも仕立てている。その背景には同時代の日本における神話  
研究の展開があった。ご講演は『かぐや姫と浦島 物語文学  
の誕生と神仙ワールド』（塙書房、二〇一八年）からのサワ  
リのご紹介だった。

そのつぎの英語講演は筆者自身のものゆえ、割愛に及ぶ。  
会議の主題に「普遍と特殊」とおっしゃるが、そもそも普遍  
の公準は誰がいかなる権限で設定したのか。そこで特殊とし  
て市民権を得るためにはいかなる策略が必要か。こうした比  
較には安定した基準枠の座標設定が必要だが、普遍と特殊と  
の鬩ぎあいにあつては、そうした座標軸そのものが揺らぐ。  
その具体例の検討である。キリスト教のケノーシス概念と仏  
教の無との比較可能性については、西田哲学を専門とするコ  
ジラ先生が猛然と嘯みついてくださり、「これで挑発行為だ  
けは目論見どおり達成できた」と応答すると、会場は爆笑に  
包まれた。それにつき、図書館ホールで簡単な講演を含め  
た展覧会が催され、最後には学生たち総出演で日本の唱歌や  
流行歌のメドレー合唱がなされた。それぞれの世代が留学中  
の日本で覚えた歌謡に忘れ難い記憶を刻んでいた。

### 三、

翌日からは、ヴィスワ川河畔の新図書館に会場を移す。会  
場に着くと、学生からこの図書館は初めてですか、と尋ねら  
れた。実は一〇年以上前、開館直後に訪れたおり、間違えて  
非常扉を開けてしまい、図書館中に警報を鳴らしたのに、自

分が下手人とは気づかなかった、といった失敗体験を、はしなくも思い出した。本日は英語発表だが分科会形式のため、主として「美学」関係に出席した。楽焼についての専門的な発表 (Eva Kaminski)、『をかし』概念への考察 (Sonoyama Senti)、『間』の概念をめぐる考察 (Yamamashi Makiko) につぎ、「演劇」については、「新作能」(Jadwiga Rodowicz-Czechowska)、『女性の能役者として著名な鏡仙会』(Uzawa Hikaru) によるご講演、「歪んだ鏡」としての歌舞伎論 (Iga Rutkowska)、『文楽に「ほとんど独自」な人形劇を見る見解 (Beata Kubiak Ho-Chi)』鈴木忠志 (Grzegorz Ziolkowski)。さらに午後には「美術史」で横浜版画論 (Aleksandra Görlich)、『現代日本デザイン論 (Jakub Karpoluk)』三島由紀夫と犬島に復元されたその旧邸 (Waldemar Afzelt)、『一九二〇年代に伊豆大島を描いたブリュルークらウクライナの画家たち (Svitlana Rybalko)』宮本武蔵作と伝えられる木彫りがハンガリーで発見された顛末 (Ovidiu Morar)。夕刻からは「哲学と宗教」で内村鑑三論 (Agnieszka Kozyra)、『および森有正における「もののあわれ」論 (Wakui Yoko)』。ほぼ全員の発表に（英語で）コメントを加える機会を得たが、紙幅の都合のため、ここに再録する余裕はない。



図1 第三日、国立美術館での見学会

作品は Henryk Hektor Siemiradzki (1843–1902) のローマを舞台とした歴史画





図2 閉会式に先立つ「平和への祈り」旧図書館・中央講堂にて

最終日には、また旧図書館に会場を戻し、まず芥川賞作家、川上弘美さんによる日本語講演「古典文学を現代文学の中によみがえらせる」。小学校時代から古典など苦手だった筆者がいかにしてここに至ったのかの、銜いない明解なお話。日本の自然観照の例として「立ち待ち月」「居待ち月」「寝待ち月」「更け待ち月」に触れ、月齢の歩みと生活時間との親密な対話が喚起される。ふとイスラーム圏で経験したラマダーンの季節の月の出を思い出した。作品へのサイン会には学生たちの長蛇の列ができ、川上さんはひとりひとりと丁寧に言葉を交わしておられた。二日目の合間には新図書館に設けられた茶室・懷庵での接待にご相伴させて頂いた。最終日には俳句の実作演習もあって盛り上がり、評判を呼んだ。夕刻からは、Ueda Susumu 指揮の Requiem Project Choir Japan。東日本大震災の慰霊を事とする企画だが、日本から巡業中の五〇名にのぼる合唱隊の歌声に聴衆も和し、忘れ難いフィナーレとなった。

(国際日本文化研究センター教授)

## パリを退屈させなかった旗本

細川 周平

昨年一〇月、パリの日本文化会館で市川右太衛門主演の『旗本退屈男』が、映画で使われた着物展と合わせて上映された。ちょうど日文研の大衆文化研究プロジェクトとパリ第七大学（デイドロ大学）日本学科共催のワークショップ（二〇月二一日～二三日）と時期が合ったのを幸い、その紹介講演を引き受けた。

この企画は一昨年（二〇一八年）、東映太秦スタジオの倉庫の奥から旗本退屈男シリーズで使用された衣装がまとまって発見されたことに始まる。スタッフは着物の「出演」作品との照合を行い、全一―四着のフィルモグラフィを作成した。時代劇の衣装は別作品に転用され、ほころびると廃棄されるのが普通で、これは奇跡といえる。

衣装のうちとりわけ鮮やかな一〇点は、二〇一八年一〇月に五日間、銀座の日動画廊と柳画廊にて展示された。搬出前に太秦にて初めて見て、手触りを確かめたくなるような物質感に圧倒されたが、今度は美術作品のように扱われ、輝きが

増したように思えた。それに合わせて丸の内TOEIで同作品を見て、大画面の迫力に心打たれた。映画は映画館で見るものだ、と今どきの風潮に逆行する念が湧いた。この上映では英語と中国語の同時通訳サービスがつけられていたのは、今後日本映画の海外上映を進めるうえでもっと考えてよい。

銀座の後、四点の着物はパリに飛んだ。『ミカヅキ、紳士サムライ』（紳士）には「毛並みの良い」のような意味も）と巧みなフランス語題をつけられ、青のバックに銀色の三月の文様、真ん中に右太衛門のポーズ写真を配した美しいポスター、チラシが作られた。そのおかげで五日間の催しには多くの観客が集まった。キモノから最初に連想される花嫁衣裳のようなタイプではなく、サムライの、それも映画のなかの衣装の展示であったことが、パリ人の好奇心に訴えたいしい。着物の脇のスクリーンで立ち回りのクリップを流したのだが、大人も子どもも立ち止まって見入っていた。たぶん大昔、ぼくがインド映画や香港映画のアクション場面を初めて見たときのような妙な印象を抱いているのではないかと想像した。映画上映は七、八割ほどの観客で、まずは上出来だったと思う。

上映前の二五分ほどの紹介講演では（一）映画の都として

の京都、(二)時代劇というジャンル、(三)市川右太衛門というスター、(四)芸術作品としての着物、という四点について簡単に述べた。国内ならば語るまでもない話題だが、チャンバラ物を見たことがない観客のために、おおよそ以下のお話を用意した。

(一) 日本映画は現代劇と時代劇の二種類に大きく分けられ、一九六〇年代ごろまで観客動員では後者が勝った。時代劇の基礎になったのは大衆演劇としての歌舞伎だった。歌舞伎は現在では大劇場で上演する豪華な一座しかニュースにならないが、かつては多数の小劇団が割拠して、全国の中小劇場を巡業していた。それを土台に時代劇は製作・配給された。一九二〇年代ごろまでちょうど歌舞伎の小劇団と同じように、小スタジオが生まれては消えた。一九二〇年代、京都に時代物専門のスタジオが続々と建設されたのは、西部(太秦)が未開拓で、野外で撮るのに絶好だったからだし、独自の演劇界を維持していて、台本、衣装、照明、かつら、化粧などのインフラが発展していたことも大きい。京都の映画史で重要なのは、一九二五年に弱小スタジオを統合し、時代劇を専門に作るマキノ映画が創立されたことで、戦時中の中断を挟んで、その遺産は現在の東映に引き継がれた。

(二) 時代劇の多くは剣劇アクション映画で、剣が交わるオノマトペからチャンバラ映画という愛称で親しまれた。勸善懲惡と恋愛絡みの単純な物語とスターの魅力が売りだった。歌舞伎と並んでチャンバラ物に寄与したのが新国劇で、これは一九二〇年代、それまでヨーロッパの翻訳劇を上演していた新劇運動から派生し、同時代の新作の脚本を上演した。女優がいらない(女優が女性を演じる)のが新味で、立ち回りで歌舞伎よりも速い動きを採用したのも大きな魅力だった。この二点で歌舞伎の近代化を果たし、時代劇と近づいた。

映画界では人気が出るとシリーズ化するのが常識だ。旗本退屈男は全三〇本撮られたうちの二三作目にあたる。このシリーズの獨創性は一人の俳優が三〇年間(一九三〇〜一九六三)にわたってその主役をつとめたことにある。シリーズ物らしさは上映作品の冒頭、主人公と忍者の戦いの場面ではっきりしている。これはちょうどテレビの連続物のイントロと同じく、その後の物語とは独立し、シリーズのロゴのように機能している。忍者のイメージが今日よりずっと素朴なのに気づくだろう。六〇年代、映画とテレビを通して、特撮によるアクションで忍者物は人気をえた。これは

時代劇映画が歌舞伎から離れるひとつの兆候と考えられる。

(三) 本作はほとんど一人の俳優、市川右太衛門(一九〇七〜一九九九)のためだけに作られたといつてよい。十代のうちに演劇界に入り端役を演じた後、映画界入りした。大げさな身振り(笑い、怒り、叫び、歩き)、発声、顔の表情、視線、その他すべては映画向けに計算されていて、「フォトジュニック」でありまた「シネジュニック」である。つまり映画的效果を狙っている。ばか殿様を演じる片岡千恵蔵(一九〇三〜一九八三)もまた歌舞伎出身の大スターで、本作の広告が述べるように「東映二大スターの大競演」だった。製作の年、一九五八年は観客動員数、映画館数に関して日本映画の絶頂期で、それにふさわしい派手な場面が多い。この殿様を喜ばせるために芸妓が踊るレビューの場面がある。娯楽本位ならではのお約束だ。

歌舞伎の影響は立ち回りの場面によく表れている。俳優の動作は日本舞踊さながらに振り付けられている。右太衛門の動きはほかの時代劇俳優と比べて美しく、監督・カメラマンもそれを知っている。斬る者も斬られる者も一瞬停止し、歌舞伎の見得のように拍手を待っているかのようだ。実際の対決の前に長いセリフがあり、主水之介とは誰か、どんなわけ

で悪党を懲らしめるのか、どうやって陰謀を発見したのかを長々と語る。まるで最高裁の裁判長のような。特に狭い場所の斬り合いは見事で、右太衛門と敵は距離を綿密に測りながらもダイナミックに動き、カメラがびったり追っている。当時のスタジオには斬られ役という美しく斬られる専門の無名の映画人もいた。

歌舞伎ベースの立ち回りに対して、五、六〇年代の黒澤明はスポーツ的、体操的な振付を編み出し、体を斬る効果音や噴き出す血を使った。時代劇に新しい波が押し寄せた。歌舞伎風の決まりきった振付はテレビの時代劇シリーズに残ったが、たぶんこの家族向けの新しいメディアと差をつけるため、映画は歌舞伎から離れていった。

本作の原題を「旗本退屈男」という。主人公の早乙女主水之介は徳川幕府直属の旗本という高い地位にありながら、額の三日月の傷が象徴するように、時に攻撃的な行動に走る。しかし「天下御免」、その行動は公的に許されている。彼は江戸の決まりきった生活に「退屈」し、本作のようなお家騒動のほか、阿片の密輸やミカドの暗殺のような恐るべき事件の匂いに誘われるように冒険に出かける。数名の手下が器用に立ち回り、彼を助ける。それぞれの土地の特産がいろいろ

な形で紹介される。同時代の観客にとっては、旅の気分も楽しみだった。最後はもちろんハッピーエンドでめでたしめでたし。

(四) 右太衛門の着物への執着は強く、東映の年間衣裳予算の八割を使ったという伝説がある。退屈男シリーズ全盛期には、一作ごとに二、三枚の着物を新調した。一九五〇年代にはカラー化が始まり、いっそう豪華になった。彼の着物は当人と同じく「シネジェニック」な出来で、実用は考えられていない。観客は金銀派手な柄を好んだ。最も見栄えがする着物は立ち回り場面で使われた。動きが激しく全身とクローズアップで撮られるからだ。着物が場面を選んだとさえ思える。足を払って刀を構えるポーズでたった数十秒のために、裏地にも凝った。右太衛門もまたどのポーズが最も映えるかを知っていた。

着物は映画と同じぐらいいたくさんのスタッフの協力関係なしでは完成しない。極細の絹糸紡ぎから染め、裁ち、縫い、仕上げ、それに洗いや保存を支える基盤が必要だが、それが衰えた現在、右太衛門の着物を再現することは不可能だそう。よく上質の着物は芸術作品のようだと言われるが、これは展示した着物には特にあてはまる。日本画家の甲斐庄楠音かひのしょうたかおと

(一八九四〜一九七八) がデザインしたからで、彼は一九一〇〜二〇年代、グロテスクな美人画で論争を巻き起こした。三〇年代に溝口健二を通して映画界と接触し、『雨月物語』(一九五三)ではアカデミー賞衣裳部門の候補に上がった。同じころ『旗本退屈男』の衣裳を担当し、それは逆のジャポニズムで描かれた。つまり想像された西洋の眼からみた日本像で、他者の眼から見た自己の像という逆転のエキゾチズムだった。

右太衛門の衣裳が無傷で発見されたのは奇跡だ。昔の映画で使われた衣裳という点では、映画博物館で飾られているマリリン・モンローのドレスやジャン・ギャパンのスーツと同じように尊敬されなければならないが、日本の映画界では長い間、忘れられていた。本心をいうと、半世紀以上前に作られた商業主義のシリーズ物が、フランスの観客に受け入れられるか心配でならない。(終わり)

上映は拍手を持って迎えられた。着物+映画の企画を統括した東映太秦撮影所所長、山口記弘氏に登壇願って、パリ上映の喜びを語ってもらった。さすが、東映ロゴのハッピーで現われた。ぼく自身は舞い上がっていて、スピーチの半分しか

通訳できなかったが、観客には映画界の重要人物がそこにいて、前例のない上映に立ち会ったことが伝わったと思う。後のお疲れ会では、次は映画界の本丸、パリのシネマテックに乗り込んで東映特集を組ませましよう、二人で野望を語り合った。

(国際日本文化研究センター教授)

## センターの活動に関するエピソード

白 雲 飛

共同研究員として、二〇一六年四月一日より、国際日本文化研究センター共同研究「説話文学と歴史史料の間に」(代表：倉本一宏教授)に参加し、二〇一九年三月末まで三年間、この研究会で研究・勉強させて頂きました。最初、私は留学生として、中国哲学・思想を専攻し、学んでいましたが、和漢比較の立場から、日本の平安末期から江戸時代までの歴史及び日本の中古・中世文学を視野に入れて考える必要があったため、この共同研究会に参加し、同時に期待もい

いておりました。

この研究会で学べたことは、私にとっては計り知れない大きなものであり、感謝の気持ちで一杯です。記憶に残っていることは多々ありますが、特に思い出深いエピソードをここに記しておきたいと思います。

### 一、実地調査の手法の学び

研究会の前後にあった実地調査は、大変参考になりました。研究会に参加する以前は、専ら文献だけで全てを判断し、研究しておりましたが、この研究会においては学んだことは、例えば歴史的な名勝の具体的な場所については、実際に足を運び、調査するということでした。倉本先生と古橋先生のご指導で、他の方々とともに現地へ赴き、例えば内裏や朱雀門の場所を確認したり、写真を撮ったり、資料を収集したりしました。歴史家の先生たちにとっては何となくも面白い活動でしょうが、これまで専ら文献を扱うのみであった私にとっては、実に新鮮で面白いことでした。ただ、実際にどういうところが役立つのかは、当時は分かりませんでした。後に、研究分担者として国内や海外で調査を行い、初めて実地調査の重要性を理解することが出来たのです。

一例として、二〇一九年十一月一日―十七日に、中国西安で「放生池」の調査を行いました。事前に「百度地図」にて「放生池」の場所を示す地図を準備して行ったのですが、それによると「放生池」の場所は「写真・西安銀行」の敷地内にあるはずだったが、実際は「西安銀行」より南南西の方角、「西安大唐西市」の「金市広場」に位置する骨董市の中に移転していたことが分かりました。「放生池」の写真とそれを説明する銘文を付します。これらの写真と後文にある写真六は基盤研究A（一般）「日本における「生き物供養」―何でも供養」の連環的研究基盤の構築」課題番号・16H01760、（代表者：国文学研究資料館、相田満准教授）の研究分担者としての調査の一部であり、ここで表します。

もう一例として、二〇一九年八月二六―二九日に中国北京で行った動物供養の調査があります。依田賢太郎氏の研究論文「東アジアにおける動物慰霊碑をめぐる文化」、『東海大学紀要・海―自然と文化』第一二巻第三号、二〇一四年、五三―五八頁）の中で、中国の「動物供養碑」について触れられています。実際の写真がなかったため、それを求めるための調査でした。その際、論文の中では「中国医学科学院動物研究所」と記載されていたものが、現地では「中国医学科学



大唐西市  
(同右)



写真：西安銀行  
(2019.11.17. 撮影)



放生池の銘文  
(同右)



大唐西市の放生池  
(2019.11.17. 撮影)

院医学実験動物研究所」と名前が違ったため、あちこちで情報を知り、やっと実際の場所に辿り着けたというところがありました。

このように、現地に行っては驚き、実地調査の必要性を実感する出来事も度々あり、この研究会で学んだことは今も私の研究・調査の中に生かされているのです。

## 二、古橋信孝先生のアドバイス

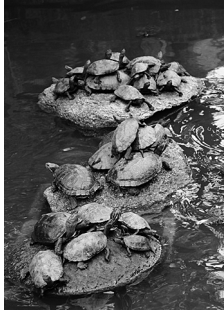
研究会においては、日文研の学者・研究者のみならず、ゲストスピーカーも貴重な話をしてくださいました。ただ、専門外の私には、研究会で発表され、議論される内容に時々追いつけないことがありました。倉本先生の計らいによって、研究会の終了後、京都の由緒ある料亭で懇親会が開かれ、食事しながら先生方に質問し、さまざまなことを教えて頂くことができました。特に、古橋信孝先生には多くの質問を投げかけ、その都度、先生からは真摯なお答えを返して頂きました。懇親会は研究会の延長のようでもあり、分からない事柄や知りたいことについて質問できる勉強の場でもありました。特に質問の多い私に対して、古橋先生は嫌がらずにいろいろと日本の文学について教えてくださいました。ご自身の著

書も送ってくださり、日本語・日本文学を研究する上でのアドバイスもいただきました。研究手法の一つとして、まず先生方の著書を中国語に翻訳することが早道であると教えて頂いたのですが、そのことを聞いた私は、日本文学が専攻でない自分出来るかどうか悩みました。実際には二〇〇七年から時々先生方の論文を中国語に翻訳し、公表したりもしていましたが、一冊の本を丸々翻訳することはまだ決心がつかずにいたのです。そのような中で、二〇一九年八月二二―二五日に北京大学で開かれた国際会議のために先生方の論文を訳す機会があり、翻訳の面白さが分かり、急激に意欲が湧いてきたのです。これからは、論文翻訳だけでなく、専門書の翻訳も手掛けていきたいと思えます。

また、懇親会ではいろいろな京料理を味わい、京都の街並みにも徐々に興味を抱き始めることになりました。以前は、博士号を取ることに必死で、そのほかのことに目を向ける余裕がなく、京料理や街並みなど京都の文化にも関心がありませんでしたが、この研究会や懇親会のおかげで、それらに興味を持つようになって、さまざまな場所に足を運び、京都の歴史や文化に触れるにつれて、個人的な調査も増えていきました。

写真一―五は「供養碑」に関する調査を行った時に訪問し





[写真三] 同右



[写真一]「金刀比羅神社」  
(2018.6.10.筆者)



[写真四] 同右



[写真二]「金刀比羅神社」  
(2018.6.10.筆者)



[写真五]  
「木嶋坐天照御魂神社」  
(2018.6.23.)

た京都府京丹後市峰山町泉一六五―二にある「金刀比羅神社」の「狛猫」「猫石」「猫の置物」「放生池」「亀」と、京都市右京区太秦森ヶ東町五〇番地にある「木嶋坐天照御魂神社」の「三本足の鳥居」です。ここでは地元の文化に触れ、信仰を示す珍しい品々を拝見することが出来ました。歴史書に記載があるかどうか、説話に出ているかどうかも調べていた私にとっては貴重な経験で、引き続き調査を行ってきたいという思いを強くしました。

ここ以外にも、名古屋、和歌山、長浜をはじめ、長野県、群馬県にも足を運び、調査を行いました。日本文化や歴史の教養に浅く、特に日本の近現代のことに詳しくない私にとっ  
ては、なるべく日本の多くの場所に足を踏み入れて調査をすることが、さまざまな知識を取得する近道ではないかと思う  
に至りました。その中には、貴重な出会いもありました。

（以下の写真は、すべて筆者によるものです。写真の掲載は、関係者及びご本人様のご許可を頂いており

ます。)

「写真六」は太平洋戦争後にグアムのジャングルの中で、ただ一人、二八年も生き残り、生還した旧日本兵の横井庄一氏の墓碑です。墓碑の前に「グアム島の小動物の霊」という「小動物供養塔」が建てられています。この供養塔の写真データを求められた時に、場所がなかなか見つからず、横井庄一記念館を訪ねて横井庄一氏の奥さま（写真七）にお目にかかり、ご親族の大鹿一八氏（津島市議会議員）（写真八）

それまで私は、横井庄一氏のこととは知りませんでした。

その日は、横井庄一記念館で奥さまと大鹿氏と、生命倫理や動物供養、空海和尚などについて熱く議論し、日没までの時間をともに過ごさせて頂きました。横井氏の奥さまは九〇歳をむかえ、私の書いた文章を楽しみにされているそうです。この文章が無事に掲載となれば、ぜひ奥さまに読んでいただきたいと思っています。



〔写真七〕 横井美保子氏  
(2017.12.23. 愛知県名古屋市、横井庄一記念館において筆者撮影)



〔写真六〕「横井庄一氏の墓碑」及び「グアム島の小動物の霊」の墓碑 (2017.12.23. 愛知県名古屋市において筆者撮影)



〔写真八〕 ご親族の大鹿一八氏

### 三、「漢字及び漢字文化を無くす」問題

研究会では、ベトナムにおいて中国の漢字及び漢字文化を一掃する政策が行われているということが話題になりました。これは大変デリケートな話題であり、中越の対立がこれほど険しくなっているとは思ってもよらず、辛い気持ちでおりました。その中で意見を求められると、お互いが傷つかないためにはどのようにコメントをすればよいかと考えて、かなり緊張しました。

モンゴル系中国人の私にとっては、辛い話題でした。憎悪によって文化や遺産を破壊する行為は一時的な現象かもしれませんが、その国々にとって良いことをもたらしているとは、私には判断出来ません。ただ、貴重な歴史資料となる漢字文化を抹殺することは、大変痛ましいことだと思っております。

平和主義者の私は、貴重な歴史を刻む文化財を破壊する前に、ぜひ一度、冷静に立ち止まって考えてほしいと思います。破壊行為からは何も生まれません。周知の事実であり、文化遺産を必要としている人々や、あるいは国にでも譲るか売るかするというのも一つの手かもしれません。この敵しい問題に直面しても、人々が研究者も含めて国の境界線を越えられないのは、如何にも無力で辛い現実です。

研究会では、国際問題や各国の政策も学び、今も昔も世界各地では貴重な歴史資料や文化を破壊する行為が繰り返されていることを思い知らされました。これは運命的なものなのか、私にはよくわかりません。歴史的な文化遺産は一旦破壊すると再生不能です。だからこそ、破壊行為を行う前に慎重になるべきだと思います。

憎悪は現実として存在するのは仕方ありませんが、それを超える人間の知性、智慧があるのではないのでしょうか。

以上が、この研究会において私が学んだことです。私は、これからもこの社会の成り行きを観察し、日本文化や歴史、日本文学を学び続けたいと思います。そしていつか、きつと役に立つ働きができる良いチャンスが訪れることを願っています。

(大阪府立大学客員研究員／  
国際日本文化研究センター元共同研究員)

崔 吉城

## 一・セクシー

我々は日常的にセクシー、美人・不美人、美男・美女、ハンサム、イケメン、チャームिंग、流行、ファッション、デザインなどのことを多く話す。女性に対しては、綺麗、美しい、かわいい、セクシーなどのことばもよく使う。二〇一九年九月二日、日文研・共同研究会（井上班）で朝鮮の春画に関して発表した時、メインのキーワードを「セクシー」とした。セクシー (Sexy) とは性的魅力の形容詞、性と美が混合したニュアンスの言葉、一般的に英語圏では規制語でもある。偶然であるうが国連で日本のある大臣が「セクシー」という表現を発言して話題になっていた。

「秋田美人」などのことばもよく耳にするが、それは民衆の美意識であり、文化人類学の研究対象になり得る。しかしその研究は少ない。人類学者マリノフスキー（一八八四—一九四二）は熱帯雨林地域でほぼ裸で生活する種族「未開人」の生活を観察、調査し、美と性に注目した。それに関し

ては『未開人の性生活』(Bronislaw Malinowski, *The Sexual Life of Savages in North-Western Melanesia*, 1929) に生々しく書いており、「なにが美や魅力とされるのか」を追及したことがわかる。

マリノフスキーのフィールドワークによると、パプアニューギニアのトロブリアンド島民の間では美男とは均衡のとれた身体、ほっそりした、まっすぐで背の高い体格を指し、さらに心身ともに健康、精力、生命力と力強さ、なめらかなつやつやした光沢のある肌の美しい人をいう。彼らは露出部分が多く、隠す部分が少ないが、決して羞恥心がないわけではない。男性は下腹部から腰椎部、そして陰部を被うことにきわめて注意深く、ベルトで整えている。寝床以外の所で男性が陰部のおおいをはずすことはほとんどない。女性はスカートを身に着ける。家族や親類友達という時や仕事の時には、トップススカートを脱いで、アンダースカートだけを身に着けている。

多くの「未開」民族の間では化粧や衣装は肉体を隠すものと理解されていることを、マリノフスキーは指摘している。トロブリアンド島民によると「ヨーロッパ人は良い容貌とはいえない」と言う。ヨーロッパ人はドレスやファッションな

どで人為的に姿を変えているので、彼らの肉体美は裸体生活を  
している民族には分かりにくいのである。うすい唇やわし  
鼻などもメラネシア人にとっては決して美しいものではない  
だろう。原住民の美意識は自民族中心であり、他民族より優  
れていると島民達からは考えられていたのである。この文脈  
から美の基準が如何に相対的であるかが分かる。

現代の韓国人は整形美容などが一般化して、美意識が高い  
といわれるが、身体的に美しい人が多くとは限らない。サハ  
リンに住んでいる韓国人はロシアのスラブ系民族の肉体美に  
劣等感を強く持っている。私はかつてインタビューのなか  
で、ロシアの女性は若い時は肉体美「セクシー」であり、韓  
国人は強く望んでよく結婚するが年を重ねると後悔するだろ  
うと韓国人の老婦人たちが話しているのをよく耳にした。グロ  
バル化した現代の美は、民族ごとに異なるもの、相対的なもの  
ではなく、絶対的な基準に規定されているということである。

## 二. 露出

韓国の朝鮮王朝の春画から肌の露出状況を見ると、朝鮮王  
朝時代には春画においてさえも完全にヌードにはなっていな  
かった。画のモデルは主に盛装した貴婦人と妓女であり(図

1、2)、女性の全裸の絵は  
ほぼない。図3では提灯、  
火鉢、オマルなどが描かれ  
ているオンドル部屋の男性  
(兩班・白いドルマギ)は  
裸であるが、女性はスカ  
ートを身に着けており、キ  
セルをくわえている。キセル

は貴婦人や妓生の象徴で  
ある。図4は庶民(帽子、  
青服)のようである。他の  
春画においても女性が完  
全にヌードになっている  
のは少ない。それはヌード  
が当時タブーであったか  
らであろう。春画において  
さえ女性は衣装や化粧に  
よる美とファッションが  
強調されており、完全な  
ヌードにはならず、肉体美



図1 妓生



図2 妓生



図4 春画



図3 春画

はそれほど描かれていない。

「春画」は性的な刺激を主な目的としたポルノのジャンルに当たるが、朝鮮の春画では自然風物や調度、家具などと調和した風俗画のように描かれている。一八世紀半ば金弘道と申潤福による春画二〇数点がある。申潤福の《端午風情》の川辺の洗濯場で体を洗う妓生の乳房とお尻が露出している姿、女性の胸と足、赤ん坊を背負った女性の乳房を露出している様子が描かれている。それを男性が岩陰から覗いている。正面から鑑賞するのではなく、隠れながら覗くのは金弘道と申潤福の図にも共通する（図5、6）。暗室の中で映画を鑑賞するのと酷似している。

今、世界的に女性の風貌が変化している中、韓国では女性の肌の

露出が激しくなり、肉体美が浮き彫りになっている。衣装で被われた肉体が解放され露出度が高いファッションになっている。この傾向はそれほど古い歴史ではない。一昔前までは露出は厳しく制約され、ミニスカート禁止、スカートの丈が問題になり、時々警察の取り締まりもあった。現在では女性が脚線美を見せ、大腿まで露出するようになった。露出度が極度に高くなる傾向を目にして、熱帯

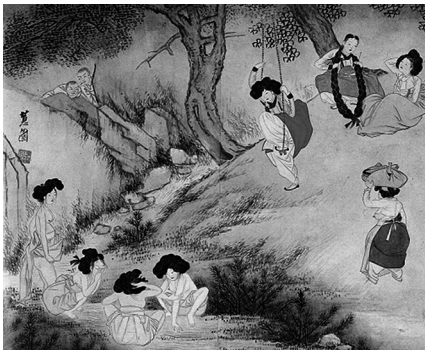


図6 申潤福作



図5 金弘道作

地域の「未開人」化していくのではないだろうか、そして究極的にはヌード化へ至るのではないだろうか、と不安にもなる。

朝鮮の春画においては、老人の男性のヌードが多いのが特徴である。回春、不老長生、春画の購入者（需要）との関連があるのだろうかという解釈もある。肌の色が女性より濃いのは女性の肌が白いことを強調しているのだろうか。猥褻ポルノ的な点を避けており、性へのタブーに配慮したためなのだろうか。儒教的貞操観の影響から性は当時の道徳、社会的規範などに反するものであり女性がヌードになることはタブーだったのである。しかし、老人の男性のヌードならば、とくに問題視されなかったのだろうか。

周知のように、日本では同時期にリアルなヌード美人画が多数ある。二〇〇五年二月一日から三日までフランス・パリ日本文化会館で法政大学主催の国際シンポジウム（「ヨーロッパと日本との空間と時間の知覚―比較研究」『日本学と何か―ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究』法政大学、二〇〇七）でキブルツ氏が喜多川歌麿（一七五三?―一八〇六）の風呂桶に入ろうとする美人画（図7）について発表した。

稀な例として男性と女性の標本一対を並べて画いた『人物

正写惣本』（図8）に注目し、裸体は四肢の全てから皮膚に至るまで同じ正確さをもって描いており、客体を知覚し、表現したもので西洋的な技術を用いていると語った。

### 三、覗き

朝鮮の春画（図9）では真正面から女性の体を鑑賞するのではなく、「覗く」構図が取られた（図5、6、10）。伝統的な婚礼式後の初夜を親族や近所の者たちが障子の穴から覗く民俗がある。

男性が岩の影から扇で顔を隠したまま覗いて見ている構図もある（図5）。トルマギという外套を着て、黒笠のカツを被った人は両班の身分と思われる。両班の覗きの場面を以て「両班の偽善を批判した」作意があったのではないかとも解説される（洪善杓「朝鮮王朝後期風俗図の社会性と芸術性」『朝鮮時代春画』図画署、一九九六・梁鎬年「韓国絵画の近代化と女性の表現」九州産業大学大学院、二〇一四）。

他方、庶民はそのまま見ている（図6）。小川で服をたくしあげて下肢を露出して洗濯をしている女性たちが覗かれている。女性たちの座り方、洗濯している姿がセクシーに見えるようである。

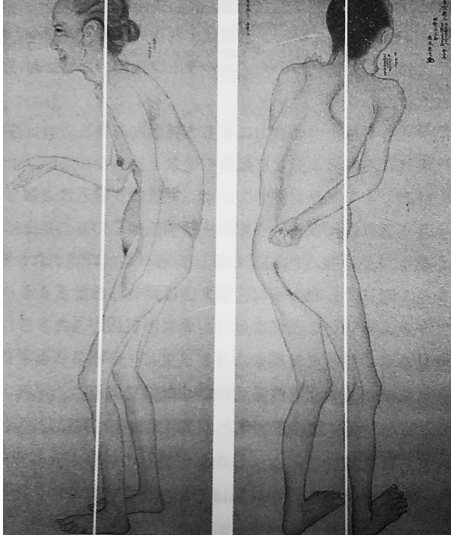


図8 『人物正写惣本』



図7 美人画

#### 四・化粧

化粧やドレスなどのファッション、衣装によって肉体美は隠れてしまうのだろうか。トロブリアンド島民にとって最も美的な部分は耳たぶであり、男女とも耳たぶに孔をあけて、耳輪をしている。また首も飾る。ハイビスカスの花や葉を髪にさして飾る。ネックレスをする。櫛で髪を整え、ココ椰子の油をぬるなどして、美しく見えるようにしている。爪の手入れをし、化粧をする。

私は幼少時、韓国の農村で育ったのだが、当時は女性が化



図9 春画鑑賞



図10 覗き



粧をすると芸者、売春婦だと言われていた。口紅を塗るとネズミを殺して食べた猫に似ていると擲揄された。化粧は芸者のものであり一般の女性は避けるべきものだった（崔吉城「韓国女性と化粧」『韓国文化』二一九号、韓国文化院、一九九八）。その韓国が今では化粧や美容整形手術などが盛んに行われ、外見主義の「整形大国」ともいわれている。

伝統的に韓国の女性は姿勢や立ち振る舞いで社会的文化的「女性」性を表現していた。いわばファッション的に「女らしく」着飾ることが求められ、肉体美は抑制されていたのである。

## 五、性と美

実は性と美という二つの要素はしばしば混合している。公的に女性の美を語る時は性を抜きにして芸術性を強調するが、実際には化粧と衣装によってセックスアピールしていることが多い。

ただし美は性と必ずしも結びつくものではない。「醜い」女性でも性交渉の相手はいる。芸術的な美しさが性的魅力に繋がるとは限らない。マリノフスキーは美女、不美女の写真をそれぞれ提示しながら、性別による住民の反応を聞いた。

「かがやく眼」「やさしい眼」「晴れやかな眼」は性的欲望の窓口になる。主に眼と口（唇）が性的魅力のポイントであるとマリノフスキーは言う。

朝鮮の妓生はどうだろうか。美、性、恋愛、結婚にも繋がることが多い。日本の芸者は性と美が繋がらない事例であると主張する日本人が多いが、それは本当だろうか。芸者は美しい芸を売る女性であり、性を売るのはないという。朝鮮にも妓生は性的欲望の対象ではないと主張する人は多い。春香という芸者が一人の男性のために貞操を貫こうとして死刑も恐れないという「春香伝」という物語がある。妓生の貞操を強調する名作である。

実のところ妓生には性的なアピールがあるが、日本の芸者のようなものであると名目をつけて日本人は妓生を買った。戦後にも続いた妓生観光がその一つである。

（東亜大学教授／

国際日本文化研究センター二〇一九年度共同研究員）

## 阪東妻三郎から上海へ、共同研究「近代東アジアの風俗史」に参加して

木村立哉

わたしは学者ではなかった。東京の映画会社に在籍し、三〇年間、ただ映画のヒットについてだけを考え続け、学び、実践してきた人間に過ぎなかった。ただその学ぶ過程で、避けて通れなかったのが、映画の歴史であり、そもそも映画はどのように生まれ、どのように育ち、どのように人々に受け入れられて来たのか、知りたかったし、欲望にまかせて調べ尽くすことで大いに知ることとなったわけだが、さて気がつくのと、ただ知りたかっただけのことを知り、考えただけであつたのに、試論として請われるままに雑誌等に発表するだけでなく、ウィキペディア日本語版に大量にページを作成していたりもしていたのである。

そして、わたしは、京都にいた。

東映京都撮影所に所属し、東映太秦映画村映画資料室で、四〇年にわたり大量に蒐集され、すでに完璧に整理されていた古今のノンフィルム資料を前に呆然としていた。時間を経

て朽ちようとする資料という名の物質、それにまわりつくホコリやカビと格闘していた。

そんなわたしが突然、国際日本文化センターの井上章一教授からお誘いをいただき、「近代東アジアの風俗史」の共同研究員を拝命したのは二〇一八年四月のことであつた。



阪東妻三郎プロダクション (1926年)

＊

わたしが当時勤務していたその場所は、かつて九四年前の一九二六年、まだ満二四歳の新進スター俳優でしかなかった阪東妻三郎（一九〇一年～一九五三年）が竹やぶを切り開いて、自らのプロダクションのための撮影所を建設した、まさにその土地であった。それが現在の東映京都撮影所である。東映はもちろん戦後に設立された会社だ。

今でこそ「映画の撮影所といえば東京か京都」「京都の撮影所といえば太秦」とだれもが思っているが、太秦の地に撮影所を建てたのは、阪東妻三郎プロダクションがいちばん最初なのだ。大映通りで知られる大映も、下鴨から移転してきた松竹も、阪東のずっと後になって太秦に集まってきたにすぎない。阪東とはもちろん、剣聖と呼ばれ、『雄呂血』（一九二五年）、『血煙高田の馬場』（一九三七年）、『無法松の一生』（一九四三年）での名演で知られる俳優であり、田村正和（一九四三年～）ら田村三兄弟の父である。

一九〇八年、牧野省三（一八七八年～一九二九年）が日本初の劇映画製作を京都西陣の千本通近辺で始めてからわずか一八年後のことであり、阪東のマキノからの独立についても牧野は大いに支援したものであるが、さて、この阪東妻三郎

プロダクションには、設立当初のものとして知られる一枚の記念写真がある。社名の書かれたステージの正面に阪東や、当時提携していたアメリカのユニヴァーサル社の人物と思われる西洋人が写っているその写真、その背景のステージはどこなのか。その後、その撮影所は、帝国キネマ太秦撮影所、新興キネマ太秦撮影所、東横映画撮影所などと名を変えていったけれども、九四年が経過したいま、このステージそのものは、もうとっくになくなってしまったのか、あるいは東映京都撮影所の敷地内にも存在するのだろうか。

そんな疑問の答えを、残されたその時代その時代の写真を追うことで突き止め、その過程を『目で見る阪東妻三郎プロダクションの痕跡』として、共同研究会の場で発表したのは二〇一九年の三月であった。結論だけを言ってしまうと、現在、第四ステージと呼ばれている建物がそれではないか、つまり九四年前のスタジオは歴史を超えて現存している、というのがわたしの説である。可燃性フィルムのおかげで火災事故が頻発、また戦争もあって、多くが燃えてしまった日本の撮影所の歴史において、貴重な遺物である。もちろん現在も稼働するステージである。

学者ではなかったはわたしが、「近代東アジアの風俗



東映京都撮影所、第4ステージ（2018年、木村撮影）

史」に関わる日本をはじめ各国出身の研究者の方々の間に紛れ込み、いろんな方々の発表を聞くにつれ、一九世紀最末期にフランスやアメリカで生まれた映画が東アジアを含めた世界各地で受容・発展していった、その最初の歴史は、まさに同研究会がテーマとする時代にシンクロしているものだと改めて知ることとなった。

\*

この十一月、同研究会の有志が、上海へ二泊三日の弾丸ツアーに出かけた。もちろんわたしもこれに参加したわけだが、共同研究会で一緒に来た外来研究員の唐権さんが現地いらっしやり、重要な資料のある書店や、上海租界の痕跡を案内してくださったのがありがたかった。

まずそもそも唐さんが選んでくださった宿がある福州路、これが戦前でいうところの四馬路（スマロ）であり、散策したその近辺の地域が虹口（ホンキュー）と呼ばれる地域であった。ディック・ミネ『夜霧のブルース』（一九四七年）にも、津村謙『上海帰りのリル』（一九五一年）にもこの地名はそれぞれ歌詞に登場しており、いずれも楽曲のヒットの後に同名の映画が製作された。野村孝『夜霧のブルース』（主演・石原裕次郎、一九六三年）、島耕二『上海帰りのリ



上海・四馬路の裏手。戦前のものと思われる建物が残っている。  
(2019年、木村撮影)

ル』（主演・水島道太郎、一九五二年）。つまりは日本歌謡史にとっても、日本映画史にとっても、重要な場所を実際に歩いたのである。

魯迅が住んでいた場所として知られる大陸新邨にも、散策するうちに当然たどり着くわけだが、大陸新邨といえ、思い出すのは水久保澄子（一九一六年〜没年不詳）である。トーカー直前のサイレント末期の松竹蒲田の女優であり、小津安二郎『非常線の女』（一九三三年）や成瀬巳喜男『君と別れて』（同年）にも出演していることで知られる。マキノ雅弘や片岡千恵蔵といった映画界の他社の人間にもファンが多かった愛らしい少女役者であったものの、デビューした一九三二年からわずか四年、のちの山口百恵よりも短い期間で消息を消した幻の人物。

堀田善衛の上海日記、一九四五年一〇月二四日の記事には、水久保が大陸新邨に住んでいるという噂話がかかれているのだ。一九四一年には神戸でダンサーだったという話、上海の中華電影に関わった川喜多長政の東和商事にいた筈見恒夫が、やはり上海で水久保を見かけた話などとともに、水久保の最後の消息の一つとして知られたものである。

上海の中華電影といえ、戦時中の日本の国策会社であ



上海・大陸新邨。魯迅も住んでいたが水久保澄子もいたという。  
(2019年、木村撮影)

り、跡地が残っている。上海戲劇学院が現在も使用しているらしいが、今回は寄らなかつた。松崎啓次、中川信夫、秘田余四郎、清水晶、野口久光といった、戦後の映画史に足跡を残した人々が若き日に関わった映画会社であり、東宝映画との合作による伏水修『支那の夜』（一九四〇年）等でも知られるが、作品の発掘や上映も含め、もっともっと知られるべき歴史である。現時点では甘粕正彦理事長で知られる満洲映画協会よりも、さらに埋もれているように思われる。



水久保澄子のプロマイド。  
(推定1930年代半ば)

\*  
共同研究「近代東アジアの風俗史」は、二年目から参加したが、この春には四年目に突入し、東アジアにおける「カフェー」についての国際研究を深める方向のようである。黒澤明の師匠である山本嘉次郎（一九〇二年～一九七四年）や東宝の副社長となった森岩雄（一八九九年～一九七九年）らが



ラウォール・ウォルシュ『彼奴は顔役だ!』  
(原題 *The Roaring Twenties* 1939年)のオープニングタイトル。

いかにもたのしげに回想する、一九一〇年代の銀座の映画の文化、ブルーバード映画や金春館の思い出、それらと切っても切れない、カフェーパウリスタ等の「カフェー」の文化を思うに、都市の文化、風俗史として、非常に刺激的であり興味あるところである。

なんといっても二〇二〇年、「狂騒の二〇年代」(*Roaring Twenties*)と呼ばれた一九二〇年から、一〇〇年という節目の年。アメリカにおいて騒がしかっただけでなく、ジャズやカフェーや映画の文化がヨーロッパやアメリカから、東京や京都や大阪や上海といった、東アジアの各地に押し寄せてくるこの時代について、もっと知りたいと思う。

(映画プロデューサー／エッセイスト)

国際日本文化研究センター二〇一九年度共同研究員)

## 『希望の歴史学』を読んで思ったいくつかのこと

## 井上章一

かつて、網野善彦という歴史家がいた。その戦後、一九五〇年代前半を語ることから、この稿をはじめたい。

一九五〇年の六月には、朝鮮戦争の火蓋がきられている。いわゆる三八度線をはさみ、半島は一九四八年から、南北の二国に分断されていた。以来、両者は紛争をくりかえす。そして、二年後には本格的な戦争へ突入した。

北側をささえたのは、ソビエトであり中国（人民共和国）である。南をあとおしたのは、アメリカであった。占領中の日本は、アメリカ軍がよりどころとする、後方支援の基地になっている。

ソビエト側はそんな日本に、混乱がおこることを期待した。アメリカの軍事行動を、日本の治安悪化でゆさぶることも、くだだてている。

そして、ソビエトは日本国内を攪乱させるよう、日本共産党に要請した。それまでの同党は、占領体制との共存にも知恵をしぼっている。革命勢力の育成、あるいは温存をはかっ

てきた。

そんな姿勢を、朝鮮戦争が目前にせまったソビエトは、非難する。今は、そういう生ぬるいことにかまけている時じゃない。立ちあがって、たたかえ、と。

はっぱをかけられ、日本共産党は武装闘争にふみきっていた。同党の指導をうけた歴史研究者たちも、その方向へ走りだした。若い学究は、山村工作隊に動員されてもいる。

しかし、彼らが工作におよんだ農山村のほうは、これをほとんど相手にしなかった。計画は失敗におわっている。おかげで、精神の荒廃を余儀なくされた学徒も、おおぜいいたと聞く。

当時の網野は、まだ若い。朝鮮戦争をむかえたのは、二二歳の時である。ただ、網野は日本共産党の文化運動をすすめる幹部史家たちと、近いところにいた。そのため、活動の前線にはかりだされていない。むしろ、中枢から号令をかける側にいた。

そんな自分のキャリアを、後年網野はくいるようになる。一九九五年には、「戦後の『戦争犯罪』」という文章も書いている。なかに、こんなくだりがある。

「自らは真に危険な場所に身を置くことなく、会議会議で



日々を過し、口先だけは「革命的」に語り……愚劣な恥ずべき文章を得意然と書いていた、そのころの私自身は、自らの功名のために、人を病や死に追いやった「戦争犯罪人」そのものであったといつてよい。

ずいぶん、廻り途をした。本題にうつる。磯前順一と山本昭宏がまとめた『希望の歴史学』（二〇一八年）を、検討していきたい。

この本は、藤間生大とらませいだいという歴史家の足跡をおいかけている。藤間へのインタビュー、編者たちの藤間論を一冊におさめた本である。藤間じしんが書いた文章も、いくつか収録されている。

藤間は、いわゆる戦後史学をひきいた、その代表的な研究者である。その全貌が見わたせる書物のできたことは、多としたい。大部な一冊をまとめあげた努力も、評価にあたいする。

しかし、そういったことへの社交的な言辭をつづけることは、ひかえよう。ここまで、とどめたい。

さきほど、網野が日本共産党の活動に大きくかかわったことをのべた。山村工作隊などへの指導を、のちには後悔しましたことも、紹介済みである。

じつは、藤間もこれに深く関与した。石母田正や松本新八郎らとならび、リーダーシップをとっている。スターリンの民族論などをふりかざし、若い学徒らをあおったひとりにはかならない。

くりかえすが、この活動は多くの歴史研究者に犠牲をしいた。網野は、そのことを申し訳なく思うと、書いている。しかし、網野以上に指導的であった藤間は、なんら釈明らしい言葉のこしてはいない。

若い学究たちが、研究者としての人生を棒にふってきた。廃人のようになった者もいる。にもかかわらず、そのことをふりかえろうとはしなかった。

私は藤間のことを、ずいぶん心の強い人だったんだなと思っている。悪く言えば、無神経な人だなと、みなしてきた。あれだけ多くの人たちに苦汁をなめさせ、あなたは何も感じないのか、と。

私に藤間へ話を聞く機会があたえられれば、何を聞いてもそのことをたずねたろう。あなたは、あなたたちの指導で人生がだいなしになった学徒のことを、どう思うのか。あなたの配下にいた網野善彦は、自らをせめさいなんている。こういう網野の懺悔をあなたは、どううけとめるのか、と。

ひょっとしたら、言いかえされるかもしれない。革命に犠牲はつきものだ、と。網野についても、彼はひ弱だからというような答えが、もどってくるのだろうか。あるいは、インタビューじたいが物別れにおわる可能性もある。そんなことを、たずねられる筋合いはない、と。

だが、それでもかまわない。いきなり、席をたれたら、それが藤間生大なんだと、うけとめよう。拒絶の姿勢もまた、人物像をしめす資料になる、と。まあ、大著をまとめようとする磯前らに、その選択肢はなかったような気もするが。

じっさい、この本は私がたずねたいと思っている、その勘所を問うていない。インタビューのみならず、藤間語りの論評でも、そこへの言及をさけている。まあ、あくまでも私に問いただしたいところではかないのだが。

石母田正は、一九五六年ごろに反省の弁をのべていたと記憶する。しかし、網野が頭（うぶ）をたれた部分、「人を病や死に追いやった」件では、口をつぐんでいる。以前は、実証主義をあれどりすぎた。石母田の自己批判は、その一点にとどまっただと思う。

しかも、そのころから石母田は、実証史家とみなされた佐

藤進一に、すりよった。革命運動からしりぞいたあととは、アカデミズムのなかに延命の途をさぐりだしている。

自分がけっきょく見すてた若い学徒のことを、この時、石母田はどう思っていたのだろう。聞けば、磯前は、石母田正の評伝にもいんどんでいるらしい。そちらでは、ぜひこの問題にもわけいってほしいと、思っている。

ねんのため、のべそえる。網野は山村工作隊などの件で、石母田からあやまられたことがあるという。「網野君、悪かった」。そうつけた唯一の当事者で、石母田はあるらしい（網野善彦、小熊英二「人類史的転換期における歴史学と日本」二〇〇一年）。非公式の場で、個人的には網野へ謝罪をするという石母田の振舞も、検討してほしい。

一九六〇年代に藤間は東アジアへ、研究のはばをひろげようとしたり。そこへも磯前らは光をあてている。その延長上にと想ってのことだろう。磯前らは、マルクスの「アジア的」という概念にも、言いおよんでいる。

私にはでる幕のない議論である。マルクスがこの形容で何を言いたかったのかは、よく知らない。ただ、中央アジアの遊牧民を論じた本は、けっこう読んできた。それで想うことがあり、ここへも書きつける。

遊牧の民は、家畜のたべる草をもとめて、季節ごとに移動する。定住はしない。土地所有へのこだわりは、希薄である。自分の土地へこもり、その管理に血道をあげる精神は、めばえにくい。土地の所有権を媒介とする封建制のしくみも、遊牧社会では成立しなかった。

封建制ができるのは、農耕を基本とする社会である。自分の土地をまもり、農耕にいそしもうとする人びとこそが、このしくみをはぐくんできた。じじつ、農耕のさかえたユーラシアの東端と西端では、封建制がなりたっている。

もちろん、ヨーロッパと東アジアのそれには、大きなちがいもあったろう。しかし、封建制がありえぬ遊牧民の中央アジアからは、どちらもよく似ている。ヨーロッパと東アジアは、同じような歴史をへてきたと考える。

マルクス主義は、世界に共通する発展段階を想定する。あらゆる社会は、以下のようなコースをたどると、みなしてきた。すなわち、古代の奴隷制は中世の封建制Ⅱ農奴制をへて、近代の資本制にいたると。

だが、中央アジアの遊牧民に、封建制はなじまない。農耕をいとままないから、土地にしばりつけられた農奴も、出現しなかった。マルクス主義歴史学のいう中世封建制Ⅱ農奴制

が、ここにはあらわれない。中央アジアでは、その公式にあてはまらぬ歴史が、くりひろげられてきた。まあ、マルクスの「アジア的」が、そこを射程にいれていたのか否かは、知らないが。

かつて、江上波夫は日本の五世紀に騎馬民族国家が形成されたこと、主張した。今の学界では、おおむね否定されている。しかし、中央アジアでは、馬にまたがる遊牧民が、しばしば国家を形づくってきた。その幻影を、江上は日本の国家建設史に投影したのである。あるいは、これをもてはやした読者人たちも。

いっぽう、網野善彦も、封建制にからめとられない人民像を、日本史に想定した。非農業民の存在感を強調する日本史像に、いどんでいる。これも、学界の支持をとりつけたとは、言いがたい。しかし、読書人の共感も獲得した。

どうやら、二〇世紀後半以後の読書界には遊牧的歴史観へのあこがれがあるらしい。中央アジアでならなりたつ、土地にしばられない歴史への憧憬が。いつか、その精神的な読み解きに、いどんでみたいものである。磯前らの本には、いいヒントをもらったと思っている。

(国際日本文化研究センター教授)

## 二〇一九年日文研特別公開シンポジウム… 「天皇と皇位継承―過去と現在の視座」について

ジョン・ブリーン

毎年秋に、日文研では「一般公開」というイベントを開催する。我々の活動を広く一般に紹介するのが目的で、施設を公開し、教員やゲストスピーカーによる講演・座談会を催し、所蔵資料を展示し、施設案内なども行う。学者同士だけでなく、一般の方々とも接することのできる機会であり、我々の年中行事の中でもとりわけ楽しい一日である。二〇一九年は講堂の改修工事のため一般公開は開催不能となったが、一般の方々に是非とも秋のイベントを提供したいという声が日文研所内から上がった。以上がこの特別な公開シンポジウムが生まれた経緯である。さて問題は、テーマと発表者をどうするか、開催場所をどこにして、開催時期を一体いつにすればいいのか。一から決めなければいけないことばかりであった。

実行委員長を仰せつかった筆者は、テーマとして「天皇と皇位継承」を提案した。自分の近代天皇の研究とも重なり、

また所内には古代・中世・近世の天皇を研究する同僚もいる。何よりも、タイムリーなテーマであった。二〇一九年四月三〇日、歴史上特筆すべき代替わりが行われた。天皇の退位に先立ち、二〇一六年八月に全国のテレビ放送局が天皇の「おことば」を報道した。前例のないおことばは、天皇が退位の意向をにじませるもので、さらには象徴天皇はこうあるべきではないかという自らの天皇論を披露した。それは、その後様々な天皇論が飛び交う契機となるものであった。政府は「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」を公布せざるを得なくなり、二〇〇年ぶりの「生前退位」が実現した。二〇一九年は天皇以上にホットな話題がなかったのである。

天皇問題に学際的かつ国際的に取り組むことができる研究所は、日文研ぐらいいかないと自負しているが、さて、発表者を誰にすればいいのか。結局、まずは言い出しっべの筆者が手を挙げた。その後は、ご快諾をいただいた順番はもう覚えていないが、古代文学・古代王権の大家で元号「令和」の考案者ともされている日文研名誉教授の中西進先生、古代から近世までの天皇に詳しい倉本一宏教授、近世史全般に造詣が深い磯田道史准教授の参加が決まった。同時に、天皇と皇位継承を語るには外からの比較的な視座も欠かせないと思

い、欧州王室研究の第一人者である関東学院大学の君塚直隆教授にも協力を仰ぎ、参加いただけることとなった。

テーマと発表者はこうして決まったが、次に悩むことになったのは開催の場所である。日文研の講堂は五六〇名まで収容可能な極めて広いスペースを誇っているが、残念ながら工事のため使えない。似たような施設は京都市内のどこにあるのか。二〇ほどの施設をリストアップし、見込みのあるところには足を運んだ結果、京都府立京都学・歴史館が我々のニーズに最も適しているとの結論を出した。歴史館の大ホールは四三〇名が収容可能な最新の施設であり、京都市営地下鉄烏丸線北山駅から徒歩5分もかからない、非常にアクセスのいい場所にある。これまで日文研の研究活動を知る機会の少なかった社会人、学生などにアピールするには最適だと思った。歴史館のスタッフが我々の企画に大変関心を示してくれたことも心強いことであった。そして、歴史館で開催するに当たり、例年の一般公開とは異なる申し込み方法を導入することにした。ハガキまたはWEBフォームで申し込んでもらい、学生かどうかを確認し、定員四三〇名を超えた場合は抽選をする、しかも座席が選べない「全席指定」という新しいシステムをとった。最後に、特別公開シンポジウム開催

のタイミングについて、一〇月二二日の「即位礼正殿の儀」と十一月四日の「大嘗祭」の間なら世間の関心が最も高いのではないかと考え、歴史館と交渉の末、十一月九日（土）午後と決めたのである。

日文研・歴史館共催となった「日文研 特別公開シンポジウム 天皇と皇位継承―過去と現在の視座」は二部構成で行った。第一部「古代の王権」では、中西名譽教授による講演『万葉集』と王権の後、続く磯田准教授との対談で飛鳥・奈良時代の王権・朝廷の姿に迫った。第二部「過去と現在の皇位継承」では、前半が倉本教授による「前近代の皇位継承」、筆者の「近代天皇制と皇位継承儀礼」、そして君塚教授による「欧州王室との比較で見た皇位継承」と題する各講演を行い、後半は発表者全員を巻き込んだ座談会とした。日文研准教授の楠綾子が全体の司会を務めた。

中西進名譽教授はその講演で『万葉集』歌人が天皇についてどのように記述し、大伴家持や柿本人麿らが天皇という存在をどう理解していたのかを論じた。『万葉集』では、「天皇」・「皇」に比べ「王」という表記が多く、それは天皇が王道を行う存在だと理解されていたことを示すと指摘した。「天皇」という表記は、大伴家持など編纂者だけが使っており、

そうすることで彼らは「天武朝の正当性を守ろうとしたのではないか」という考えを披露した。磯田准教授との対談で、テーマは飛鳥・奈良時代の王権そのもの問題にも及んだ。

日本古代史を専門とする倉本教授は、皇位継承の歴史の変遷を取り上げて発表した。太上天皇と天皇という二重構造ができた奈良時代、摂関政治で天皇の母方のミウチ（藤原家）が権力を握った平安時代、そして幕府が皇位継承を左右する鎌倉・室町時代と、それぞれの皇位継承の特徴を解説した。

次に発表した筆者は、近現代の皇位継承儀礼を歴史文化人類学的な観点から検討し、天皇が皇位継承の場で権力関係を構築していく力学に光を当てた。筆者はとりわけ天皇と天照大神及び神武天皇をはじめとする歴代皇霊との関係構築に焦点を当て、皇位継承儀礼のルーツを明治維新にまで辿ってみた。

欧州国際政治が専門の君塚教授は、地球環境問題、多文化共生、女性・子どもの人権擁護などに率先して関与する欧州王室を紹介し、「令和の皇室のあり方に示唆を与えてくれる」可能性までを指摘した。オランダ、ベルギーなどでは君主の高齢化による生前退位がすでに慣例化している事実にも触れた。

これらの発表に続く座談会では、中西名誉教授が「日本にとって皇室とは何か」という命題を提示し、そこから活発な



特別公開シンポジウム座談会の様子

議論へと発展した。「今後の天皇制について国民一人ひとりが考え続けなければならない」というのが一種の結論であった。

今回の日文研・歴史館共催の特別公開シンポジウムはかなり盛況であった。参加者アンケートからも、テーマは十分に魅力的であり、登壇した先生方の発表も大いに興味を持たれたことが読み取れる。土曜日の開催もよかった。筆者が実行委員長として特に嬉しいのは、「今回初めて日文研の行事に参加した」という方々が多数いたことである。学生も多かった。歴史館の広報活動も功を奏しただろう。アンケートの自由記述部分を見れば、特別公開シンポジウムの中身に関しては積極的なレスポンスが圧倒的に多く、発表者は十分な知的刺激を参加者に与えたであろうことがうかがえる。

反省すべき点がないわけではない。筆者が実行委員長兼発表者として感じたのは、時間的な余裕のなさである。第二部では発表時間が発表者一人につき一七分しかなく、座談会も十分な時間が取れず、発表者はそれぞれ一回の発言だけで終わってしまった。アンケートでも、「時間が足りない」、「消化不良気味」、「一日のイベントにすぎなかった」などという意見が多くあった。音響的に多少の問題もあり、「声が反響してよく聞き取れなかった」、「上手く聞き取れない」、「音響

が悪い」など不満の声があったことも事実である。

以上のような問題点があったとはいえ、今回の日文研・歴史館共催の特別公開シンポジウムは、有意義で、収穫の多いものであったことに変わりはない。二〇二一年から従来通りの一般公開を秋に開催する予定であるが、いずれまた歴史館の皆さんと手を組んでイベントを催したいと思う次第である。

(国際日本文化研究センター教授)

共同研究「植民地帝国日本における知と権力」あとがきのあとがき

松田利彦

先頃、国際日本文化研究センターでの共同研究「植民地帝国日本における知と権力」(二〇一三〜一六年度)を終えた。この共同研究については、共同研究委員会に共同研究終了報告書を提出し、成果報告書『植民地帝国日本における知と権力』を編み、かつ、成果報告書を刊行してくださった思文閣出版の出している『鴨東通信』(二〇一九年四月号)には小

文を載せていただいた。それに重ねての今回の執筆である。「あとがきのあとがき」というタイトルは、屋上屋を架した文であることを重々承知の上でのものである。

準備会・取りまとめ・国際研究集会を含めると五年間にわたったこの共同研究では、日本の台湾・朝鮮・「満洲国」などに対する支配において、学問的知識・政策構想・イデオロギー・スローガンなど多様な形をとって現れた「知」に着目しつつ、それが帝国の支配に果たした役割や、植民地支配下における被支配者の「知」のあり方を考察してきた。具体的には、知識人の学術活動と政策、政策担当者思想・対抗知といったことが多くの班員に共通する問題関心となった。

植民地権力と被支配民族にまたがるこのような広い意味での「知」が植民地統治を規定した、という枠組みから本共同研究は出発した。そこには、従来の日本帝国の学知研究が、ややもすれば、日本人の構築した知のみを考察対象に限定する傾向があったことへの批判をこめている。本共同研究は、単に日本本国の知の影響が植民地にいかにか波及したかという問題ばかりでなく、むしろ日本本国の知がどのような植民地現地の知と向き合い競合・包摂し合わなければならなかったかという問題にも注意を向けた。さらに、日本のアジア各地

域に対する植民地統治の時期を孤立的に論ずるのでなく、その前後、特にポストコロニアルな文脈の中で捉えることも重視した。解放・光復前後の知の継承／断絶は本研究の大きなテーマの一つとなった。

さて、延べ一〇〇本を超える報告を得た共同研究を終え、いささかの疲労感を覚えている（徒労感ではない、念のため）。この共同研究は、所長裁量経費による「国際共同研究」のパイロットケースとしてはじめられたため非常に緊張感があった。韓国・台湾から毎回多くの研究者を呼び、たいいてい朝から晩まで二日間にわたり議論し続け、しまいには日本語と韓国語とマンダリンが飛び交うこともしばしばだった。また、二、三、四年目にそれぞれ韓国（翰林大学校）・台湾（中央研究院台湾史研究所）・日本（日文研、国際研究集会）で連続シンポジウムを開催している。すでに五〇代に入り体力も落ちはじめていた私には、なかなかのハードワークではあった。

この共同研究は、また、ちょうど日文研の財政逼迫があらわになる直前の時期に当たっていた。まだ多少なりとも豊かだった財政を背景に、このような研究者としての好き勝手な許されたのだと思う。逆に、この共同研究会と同じ規模の研



研究会を催すことは、財政の現状ではまず無理ではないだろうか。その意味では、パイロットケースとしての役割は果たせなかったといわざるをえないのだろう。私のせいではないと思うが。

さて、日文研の同僚諸賢は、私の共同研究の回顧にどのような内容を期待されているのだろうか。こんなに頑張りましたという自慢だろうか。あるいはこんなことをやらかしましたという失敗談もしくは反省の弁なのだろうか。あるいは（私の



写真1 (中央研究院台灣史研究所におけるワークショップ、2015年10月)



写真2 (翰林大学校におけるシンポジウム、2016年6月)

もっとも得意とする)愚痴だらうか。あるいは案外何も期待していないかもしれない。いずれにせよ一応すべて書き留めておくことにしよう。

自慢の方から書かせていただく。本誌『日文研』での執筆依頼を頂戴したのと同じ頃、共同研究に対する外部評価がメールで届いた。Sだった。率直に言えば、喜びよりは過分な評価に恐懼する気持ちの方が先に立った(Sを取り消して欲しいと申し立てているわけではない、念のため)。特に評価していたのが、成果報告書(松田編『植民地帝国日本における知と権力』)の冒頭に、序文・解説(収録論文の梗概)・研究動向を付し全体を俯瞰できる構成としたところだったように思う。しかし、個人的には、この冒頭、とりわけ研究動向論文こそが共同研究を振り返ったとき最も心残りな部分だった。

ここからは反省談になる。たしかに、研究動向論文——最終的には「植民地期朝鮮における「知と権力」をめぐる研究の現況と課題」というタイトルになった——は、執筆に多いに苦勞した。「知」「権力」というキーワードで植民地朝鮮に関わる先行研究群を整理しようとしても、対象が広すぎてどのようにまとめたらいかがさっぱりイメージがわかかなかった

のである。共同研究主宰者であれば誰しも経験があると思うが、狭すぎるテーマを掲げると人が集まらないし、広すぎるテーマではじめると風呂敷をたたむのに苦勞する。

成果報告書は植民地期の朝鮮・台湾とその解放後にまたがるが、研究動向論文の朝鮮版は私が書き、台湾版は畏友・陳延媛さん(中央研究院台湾史研究所)に執筆していただくことにした。陳さんからは、どのような枠組みの論文を求めているのか分からない、見本を見せて欲しいとたびたび催促を受けた。結局、「知と権力」という側面から見た植民地期朝鮮史の概説」という論文を書くつもりでまず大枠を書き、ここに関連文献はめこんでいくという方法にたどりつくまで一年以上を要した。これからこの分野を研究しようとする初学者にとっては、それなりに役立つガイドにはなっただろう。しかし本来、この作業は、共同研究を開始するときにはすませておくべきものだったと思っている。共同研究会の初めに、班員を前に、主宰者は自分の掲げたテーマが何を目指し、それがどのような学問的系譜の継承あるいは批判として位置づけることができるのか、そのような道筋を語る事が理想だと考えている。私は、これまで三本の共同研究を主宰してきたが、研究会の初頭にきちんとこのようなことができ

たのは最初の共同研究（「日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚」二〇〇四～二〇〇六年度）だけだったと自己採点している。その後の共同研究は、むしろ共同研究をしながらその分野について学んでいくという自転車操業になってしまったように思う。それはそれで自分の視野を広げる意味があったが、他方で過去の自分の業績を超えられないところに自分の老いを感じずにはいられない。

話は少し飛躍する。ここからは愚痴である。ここまでの部分を読まれた方のなかには、この共同研究にたずさわった五年間は、さぞかし研究に耽溺しえた期間だっただろうと受けとる向きもあるかもしれない。しかし実のところ、少なくとも主観的にはそうではなかった。共同研究が始まってまもなく私は大学院（総研大国際日本研究専攻）の専攻長に二年間任じられ、その後さらに二年間、機能強化担当調整主幹となり、都合四年間、日文研執行部の末席を占めた。特に調整主幹時代の「国際日本研究」コンソーシムの立ち上げは、片手間のできるような仕事ではなかった。一年間に一篇の論文も書けなかったことはいつぞやの木曜セミナーでお話したとおりである。ここで私の言葉で本音を書くことはおそらく立場上いろいろとまづいで、最近の研究で目にした資料の一

節に代弁していただく。

筆者の田中正四は京城帝国大学（植民地期朝鮮における唯一の官立大学）医学部衛生学予防医学教室の助教授で、日本敗戦前後における植民地朝鮮の様子を克明に日記に残している。以下、一九四五年七月一日の日記よりの引用（田中正四『瘦骨先生紙屑帳』一九六一年）。

学校の教員というものは「中略」非常に忙がしい。それにも拘わらず勤労奉仕を買って出て、なれない仕事をやって奔命に疲れている。そのあとを埋めるために、まだ一人前になっていない師範学校の生徒を動員する。そしてお互いに何か忙がしいような、人一倍働いたような錯覚を起こして僅かに自分を慰めている。「中略」

日本人植民者であり高等教育機関の教員でもあり、それゆえ客観的には特権的身分だった田中に我が身を重ねてしまう自分について苦笑してしまう。しかし、妙に人ごととは思われない感覚に満ちた文章でもある。ある意味、現代の大学改革の時代は戦争の時代なのだろうか。

（国際日本文化研究センター教授）

## 共同研究会「身体イメージの想像と展開」を立ち上げて

安井 眞奈美

国際日本文化研究センターの共同研究会に、オプザーバーとして参加された方から、次のようなメールをいただいた。「様々な分野からの学際的研究と、皆様が和気藹々と自由に発言していらっしゃるご様子に、深く感銘を受けました」と。主催者としてあまり意識したことはなかったが、自由に発言できる雰囲気は確かにそうかもしれない。これまで参加した海外を含むさまざまな研究会の中には、限られた人しか発言できなかつたり、発言が憚られる雰囲気があったりするようなものも存在していたからだ。

共同研究会とは、国際日本文化研究センターのもっとも重要なプロジェクトの一つで、特定のテーマについて、国内外の研究者が集まり集中的に議論を深め、成果を公表していく取り組みである。二〇一七年に日文研に移った私は、さっそく二〇一八年より三年間の計画で共同研究会を開始することとなった。これまで民俗学や文化人類学の立場から出産の研

究を進めてきたので、次は身体そのものを捉えてみたいと考え、テーマを「身体イメージの想像と展開——医療・美術・民間信仰の狭間で」とした。身体の研究はすでに多くの分野でなされているので、おもに凶像や儀礼を素材にして研究を進めることにした。

共同研究会のもう一人の代表者は、日文研に外国人研究者として滞在されていたローレンス・マルソーさんをお願いした。マルソーさんは、ニュージーランドのオークランド大学で日本の近世文学を研究されている。海外の研究動向も視野に含めて共同研究会を開催すべく、マルソーさんにご協力を仰いだ。

なるべく多彩で異なる学問分野の研究者に参加してもらうため、公募を行った。知り合いの研究者だけからなる「仲良し研究会」では困るのだ。まずはマルソーさんに、海外の日本研究者のネットワーク、文学研究者のメーリングリストなどを使って広く呼び掛けてもらい、研究者を募った。また私自身も、リクルート活動に勤しんだ。さまざまな研究会や学会、懇親会に積極的にでかけ、おもしろい研究をしている人を探した。

その一つが、二〇一七年夏に東京藝術大学で開催された美

術解剖学会である。学会には美術史や医学、歴史学、芸術学などさまざまな分野の研究者が参加し、たいへん興味深い研究発表が続いた。その際、近世の解剖図を美術史の視点から分析していた若手の研究者に出会った。自らも作品を描き、ネパールで若手の芸術家たちと一緒に展示を行うなど、ユニークな活動をされている木森圭一郎さんである。懇親会で声をかけ、新たに発足する共同研究会の概要を説明し、すぐに参加を快諾してもらった。

重視したのは自然科学と人文社会科学を融合した共同研究という点である。理系と文系の研究者が対話を重ねること、想像もしなかった成果が得られるかもしれない。そのような新たな発見の場に、私自身も立ち会ってみたかった。知り合いの研究者を通じて、理系の研究室をいくつか訪ねてみることにした。京大のある研究者の方からは、多忙な中二〇分の時間をいただき、具体的にどのような研究課題に取り組むのかを説明しようとした。とは言え、明確な結論が見えているわけではなく、むしろ共同研究会を通じて新たな地平を開拓したいと考えていたので、緊張もあり説明はしどろもどろとなった。すぐに時間が経って、その方は次の面談のため研究室を去って行かれた。あとに残された私は、研究室

の創設前から助手をやっています、という「研究室の主」のような品の良い女性が煎れてくださったお茶をいただきながら、別の研究者の方と話が盛り上がり、厚かましくも研究会に来てもらう約束をした。

文系、理系のさまざまな分野の方々による共同研究会となったので、当初、多くの方々が「アウェイ」感を感じておられたようだ。また、日文研のこれまでの各種研究会やシンポジウムに比べて、女性の占める比率が高くなったのも特筆すべきことであろう。私は「身体イメージ共同研究会」のロゴ・マークまで作り、念入りに準備を行った。

三年間の共同研究会では、各年、個別のテーマを設定し、集中的に議論できるようにした。一年目は「身体部位のイメージの解明」、二年目は「身体全体のイメージの解明」、三年目は「儀礼・祭礼・芸能等における身体を使い方とイメージの解明」である。

身体各部位をテーマにした初年度、初回のテーマを「胎児」とした。これまでの私自身の出産に関する研究成果と、共同研究会の初回にふさ



「身体イメージ共同研究会」ロゴマーク

わしく、命の誕生から始めたいと考えた。最先端の産科医療の現状を踏まえたうえで、人々の出産や流産、死産に対する意識の変容を議論するため、発表者には、これまでいっしょに研究を進めてきた、大阪大学医学部附属病院胎児診断治療センターの産科医・遠藤誠之さんと、水子供養の研究を精力的に進める民俗学者の鈴木由利子さんをお願いした。共同研究会の発表では、超音波診断による胎児の画像がクリアに可視化されるようになったことと並行して、三〇年ほどの間に人々の胎児に対する意識も大きく変わっていったことなどが明らかにされた。この成果は、共同研究会終了後の研究書でご報告したい。

日文研の所蔵するコレクションによる展覧会「描かれた「わらい」と「こわい」展―春画・妖怪画の世界」(二〇一八年 細見美術館)を共同研究会の一環として皆で見学し、展示の企画者でもあった石上阿希さん、木場貴俊さんに解説してもらったこともある。折しも前日に沢山美果子さんが発表された、近世の胎児と子宮の様子を描いた絵の展示もあり、実物を鑑賞しながら議論をするという絶好の場も実現した。

共同研究会では、時間の関係で議論し尽くせなかった課題を、次回、掘り下げて取り組むようにした。人文社会科学と

自然科学で理解の異なる概念については自然科学の研究者の方にミニレクチャーをお願いし、全員で理解を深めた。たとえば古今東西、男女の性器をもつ両性具有の人物像が描かれてきたが、これは日本の近世の妖怪画にも見られる。そのことを共同研究会で話題提供したら、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学教室の高橋淑子さんが、理系では「両性具有」という言葉は用いず「雌雄同体 (Hermaphrodite)」と言い、そのような状態は決して特異なものではなく、男女のあり方のグラデーシヨンの一つ、と説明された。学部生向け授業のためにご自身が工夫して制作されたDVDを用いて、発生的に男女の生殖器官がどのように作られるのかをわかりやすく図式化してくださった。海外からも数人の研究者が参加していたので、最新のジェンダー研究の成果を共有し、それについて英語と日本語を交えて、医学、発生学、歴史学、人類学などの観点からディスカッションを行った。またスカイプを通して、海外の研究者の意見も聞くなど、ネットワークはさらに広がった。

この時、オックスフォード大学から参加した文化人類学者のロドルフォ・マッジオさんは、流暢な日本語で堂々と発表された。日本語の学習を始めたばかりであったが、この日の



共同研究会の様子

ために猛練習をされたとのことで、その熱意に頭の下がる思いだった。研究内容は、レズビアンのカップルからも卵子だけを用いて出産を可能にする最先端の研究を人類学的に検討していくという興味深いものであった。共同研究会の様子はレビューとして日文研のホームページに載せている。あわせてご覧いただきたい。(http://topics.nichibun.ac.jp/pci/ja/sheet/2019/02/12/s001/)。

発表やディスカッション、懇親会の席での対話をもとに、日文研の共同研究会から、グローバルな研究活動も展開している。たとえば二〇一九年四月には、デンマークのオーフス大学で開催されたJAWS (Japan Anthropology Workshop) に、有志とともに参加し、「身体と儀礼」のパネルを組んで発表をした (http://topics.nichibun.ac.jp/pci/ja/sheet/2019/04/24/s001/)。このように、多様な分野の研究者との対話を基に、さらなるアイデアが生まれている。

二〇二〇年度はいよいよ共同研究会の最終年度となるが、「身体イメージの想像と展開」というテーマで、日文研の所蔵する画像コレクションを中心とした展示を行う企画を計画している。展示の図録は、日本語だけではなく、英語や中国語なども取り入れ、多くの皆さんにお届けしたいと、期待は

膨らむばかりである。

命の誕生、胎児のイメージを初回のテーマとして始まった共同研究会は、身体のさまざまな部位をめぐる、儀礼や祭礼、スポーツにおける身体を吟味し、最終的に「死体」にいきつくこととなる。あるいは「あの世の身体」もしくは、私のもう一つの研究テーマである「妖怪の身体」にまで及ぶのか、それは共同研究会の議論の深まり次第である。今後の展開と、研究成果の報告書刊行にぜひともご期待いただきたい。

(国際日本文化研究センター教授)

## 共同研究会「縮小社会の文化創造…個・ネットワー ク・資本・制度の観点から」のこと

山 田 奨 治

一年間の準備期間を経て、二〇一九年度から三年間の予定で、タイトルにある名称の共同研究会をはじめた。一〇年ほどまえから著作権法の領域にも足を踏み入れ、いくつかの著作を世に問うてきた。その経験をふまえ、社会科学が弱い日

文研で、社会問題から現代文化を考える研究会を開くことに、いくばくかの意義はあるだろうと考えたからだ。

根本にある問題意識は、日本が避けがたく直面している人口減少と、それに起因する諸事項だ。日本の人口は二〇〇八年の一億二八〇〇万人をピークに、過去に例をみないほどの急速な減少に転じている。二〇五三年には一億人を切り、二一〇〇年には現在の半分以下になると予測されている。

今後、大災害や戦争が起きたり、移民を大量に受け入れられない限り、人口予測が大きくはずれることはないといわれている。前二者は起きてほしくはないし、大量の外国人を自国民として迎え入れる覚悟も準備も、この国にはまだないようだ。

予測どおりならば、二〇〇八年に二二パーセントだった高齢化率は、二一〇〇年には三八パーセントになる。経済成長がままならないなかで、家計の可処分所得は一九九七年から減少しはじめ、二〇一五年には一九八〇年代半ばの水準に戻っている。

人口が縮小・高齢化し豊かさが失われるなかで、社会にさまざまな分断が起きている。富裕と貧困、東京と地方、本土と沖縄、「日本人」とそれ以外、高齢者と若者、健常者と障



がいて、性的多数者と少数者、グローバル・エリートとローカルな民などだ。

人口減、高齢化、格差、分断、貧困などのことは、社会・経済の文脈ではすでに多くが語られ、幾多の書物が存在する。しかし、文化創造の観点から縮小社会を考える研究は、それほど多くはないように思える。

社会が縮小する時代に、ひとびとが生み出し、享受する文化はどのようなものになるのだろうか。文化的な創造性の発現に資本ほどの程度関与するもののだろうか。現代の日本で新たな思想や価値につながる何かが芽生えているのか。制度や社会的な圧力によって生まれなかったり、変質してしまっただけのものがあるのではないか。社会福祉や地域振興と文化創造は、ときに矛盾をはらみながら展開するが、はたしてそれらは個の「生」とどうかかわっているのか。

社会の縮小とともに、生産・消費・輸出が縮小しても、それを悲観する必要のない社会をどのように作ることができるだろうか。重要なのは、非排除性（誰でも使える）と非競争性（使っても減らない）を備えた公共財としての文化と、それを創造する力だろう。

注意しなければならぬのは、文化の力で成長を取り戻すと

いった、文化産業的な陳腐な発想に陥らないことだ。それでは、高度成長期の右肩上がりの神話にとらわれたままだ。経済が永遠に成長しつづけることなどありえない。成長曲線が鈍り、下降線を描きだしたとたんに、ひとびとは不幸になる。この三〇年間の日本社会は、それを経験したのではないか。

成長や拡大ではなく、個の「生」との「かわり」の観点から文化創造を捉えるべきではないか。そうすれば、文化は巨大化した産業による束縛から解き放たれ、縮小社会のものでその位置づけも変わってこよう。わたしたちが好きな歌を歌い、好きなイラストから二次創作し、好きな外国小説を翻訳し、それを公共の空間で披露する自由をもつことは、わたしたちが「生きる」ことの根幹にかかわることであり、その自由は保障されるべきだ。そのような観点から、現代のさまざまな「制度」を見直してみることも必要だろう。

一例として、「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」「障害者アート」（以下では日本の文脈にしたがい「障害者アート」と総称する）などと呼ばれているものを考えてみよう。日本の「障害者アート」は、もとは障害者支援施設での「活動」として取り組まれてきたものだった。それが、障害者の社会参加のたかまりとともにその「美」が見い

だされ、一九九〇年代の末頃からはそれを「アート」として推進する動きが盛んになった。

そして、二〇一〇年にパリで開催された「アール・ブルジュット ジャポネ展」が大成功し、それが国内を巡回して人気を博したあたりから、「障害者アート」の市場価値が広く認知されるようになった。海外のアート・フェアで数百万円の値がつく、日本人アーティストも現れている。

そうした風潮も後押しして、二〇一九年には「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が超党派による議員立法で成立した。その目的は、「障害者の個性と能力の発揮及び社会参加の促進を図ること」とあるものの、「芸術上価値が高い」作品とそうでない作品を区別し、前者をより支援するものになっている。

「障害者アート」という「制度」は、障害者の個の「生」とどのようにかかわり、それをどのように変容させているのだろうか。福祉事業者は、この法律をてこに補助金を獲得できる。作品の展示や販売の機会が増えたらうれしい、というアーティストもいる。作品の高値などこ吹く風で、マイペースな制作をつづけるひともいる。一方で、自己の作品の市場価値を理解できないような知的障害者のアーティスト

や、「家族の重荷」だった存在が富を生み出しはじめると、手のひらを返す親きょうだいもいる。

ひとつの特筆すべきスタジオを紹介しよう。大阪に「アトリエ インカーブ」という通所型の福祉施設がある。そこには知的障害のある利用者二五名が在籍し、全員がアート活動に専念している。施設で美術教育を施しているわけではない、スタッフはアーティストの制作には口を挟まない方針をとっている。入所するのに画才を試験しているわけでもないが、複数の世界的なアーティストを生み出すなど、驚くべき活性を示している。

こうした実例から、空想の翼が広がる——最低限の生活保障とたっぷりの時間、そして好きなことができる環境があれば、驚くようなものを創り出す力は、案外、誰にでも備わっているのではないか。それを引き出すような制度、たとえばベーシックインカムのようなものが導入されたら、社会全体で創造的な活動がたかまるのではないか。

かつての牧歌的な時代の大学研究者への労働報酬は、ベーシックインカムのな色彩があったと思う。認知資本主義論の教えるところによると、知識や表現の生産のような非物質的労働においては、労働と余暇を区別することが困難になる。

固定された勤務場所に定時に勤務することにはあまり価値がない。アルキメデスの「ユリイカ!」ではないが、革新的なアイデアは、入浴中、眠りの中、散歩中に突然降ってくる。研究者にとっては重要な瞬間であっても、それを勤務時間に含めることには無理がある。決められた時間になったらおなじ勤務場所に職員が出勤し、時間がきたら退勤する「制度」は、工場での流れ作業に最適化されたものだろう。ところが昨今の「働き方改革」は、研究者のような非物質的労働者にも事務職員並みの「勤怠管理」を求めている。

縮小社会においては、広大無辺な知識・文化の領域を開拓していくことに、「個」の「生」の意義を見いだす鍵があるだろう。労働と余暇が渾然とした「働き方」と、「サービス残業」「やりがい搾取」にならないような「勤務」と報酬のあり方も、縮小社会の制度設計の問題だといえる。

西洋先進国に範を取った、近代以後の発想も見直す必要もある。アフリカに目を向けてみれば、「うしろめたさ」を媒介にした互酬性（松村圭一郎）や、デジタル技術を駆使した「その日暮らし」「シェアリング経済」のネットワーク（小川さやか）で、ひとびとは「生」を営んでいる。それらは、互助の「質」において近代国家の福祉行政を、ダイナミ

ズムにおいてグローバル・プラットフォームであるGAF Aをも越えているかもしれない。

オランダの文化学者ヴェルミューレンとフォン・デン・アカーは、ポストモダン以後の「感覚の構造」を「メタモダニズム」の語で捉えている。それは、熱狂と冷笑、希望と憂うつ、共感と無関心、単数性と複数性、純粹さと曖昧さといった両極端を揺れ動く振り子運動のことをいう。縮小社会の個の「生」もまた、長いタイムスパンで見れば、さまざまに分断した両極端を振れていくのかもしれない。そうしたことを考えながら、この研究会を行っている。

（国際日本文化研究センター教授）

展覧会「草の根のアール・ヌーヴォー——明治期の文芸雑誌と図案教育」を担当して

前川 志 織

明治三〇年代後半における新聞広告、雑誌の表紙絵・挿画や広告、絵はがきなどの印刷物には、波打つ太い曲線の飾り

枠に囲まれた女性像といったアール・ヌーヴォー風の図案を多く見つけることができる【図1】。美術評論家・岩村透は「芸界囃語」（一九〇一年）（宮川寅雄編『芸苑雜稿他』ネットアドバンス、二〇〇三年）において、次のように述べた。

「（前略）その十余年後の今日ではバリ竜動（ロンドン）に現われた雑誌、絵葉書の新模様も五、六十日後にはズンズンとこちらの新聞雑誌の挿絵表紙となって出る、（後略）」

二〇一九年度に企画・運営に携わった展覧会「草の根のアール・ヌーヴォー——明治期の文芸雑誌と図案教育」【図2】（二〇一九年一〇月二八日—十一月二二日、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、主催：京都工芸繊維大学美術工芸資料館、国際日本文化研究センター・機関拠点型基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」、監修：大塚英志・国際日本文化研究センター教授）では、このようなアール・ヌーヴォー風図案が多様な印刷物へと一気に広がった状況に注目し、特に、京都高等工芸学校（一九〇二（明治三五）年創立）において浅井忠らが担った図案（デザイン）教育【図3】、雑誌『明星』（一九〇〇（明治三三）年創刊）をはじめとする文芸雑誌の表紙絵や挿絵【図4】を取り上げ、その関連資料（資料の複製パネルを含む）



図1-2 太田三郎『『女学世界』絵葉書』、博文館、1906年、国際日本文化研究センター

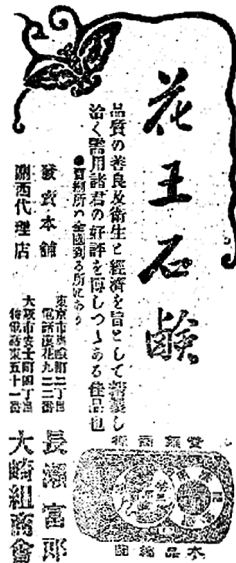


図1-1 『東京朝日新聞』  
1902年7月23日



図2 展覧会チラシ  
(デザイン：中川加奈子)



図3 土岐純一《和洋文具雑貨土岐商会》  
1911年、京都工芸繊維大学美術工芸資料館

一六〇点あまりを紹介した。

本展は、図案教育を受けた学生たちの作例と文芸雑誌の表紙絵・挿絵類との比較展示を試みた点に特徴がある。比較展示を試みた理由として、第一に、図案教育を受けた学生作品と文芸雑誌の表紙絵・挿絵類が、いづれも当時勃興しつつあった複製文化における印刷物と密接な関わりをもっていたことがあげられる。第二に、学生作品では、無名の図案家の卵たちが洋風生活を意識したデザインを試み、文芸雑誌では、

著名な美術家ばかりでなく、今ではあまり名の知られない挿絵画家たちも読者投稿欄をもつその誌面を彩った点において、名のない人々がその周辺の生活——洋風化による新しい「近代的一な生活——を彩るものとして、アール・ヌーヴォー調を選択したという共通性がみられることがあげられる。

このように、本展は、日本におけるアール・ヌーヴォーの一例を紹介するものであったが、先行研究において本展を位置づけるならば、日本のアール・ヌーヴォーが、いわば「草



図4 表紙：和田英作『ハガキ文学』第二卷第四号、日本葉書会、1905年4月

の根」のように広がり、無名の人々の間で織り成された可能性に着目した点にあると考えられよう。

これまで日本のアール・ヌーヴォーについての研究は、海野弘が、複製芸術という観点を織り交ぜ、多様な描き手を紹介しながら、日本のアール・ヌーヴォーという見方を提示した（『日本のアール・ヌーヴォー』青土社、一九七八年）。また、芳賀徹と匠秀夫も、文学と美術の交流という観点から夏目漱石や『明星』、白馬会系の画家らを取り上げ、日本の

アール・ヌーヴォーについての先駆的な研究を残している（芳賀徹『みだれ髪系の系譜——詩と絵の比較文学』美術公論社、一九八一年。匠秀夫『日本の近代美術と文学——挿絵史とその周辺』沖積舎、一九八七年）。

一九九〇年代以降には、これらの研究をふまえたうえで、美術・デザイン、文学の双方から研究が進展した。美術・デザインでは、たとえば展覧会『日本のアール・ヌーヴォー一九〇〇—一九二三——工芸とデザインの新時代』（東京国立近代美術館、二〇〇五年）が、関東大震災まで射程を広げ、アール・ヌーヴォーにおける美術と工芸・デザインとのヒエラルキーを転覆させようとする運動という側面に注意を向けながら、工芸や印刷デザインにおけるその諸相について広く言及している。また、デザイン界の動向のうち、浅井忠と京都の図案教育におけるアール・ヌーヴォーについては、並木誠士らにより研究が重ねられている（並木誠士・松尾芳樹・岡達也『図案からデザインへ——近代京都の図案教育』淡交社、二〇一六年）。また絵はがき研究が、現在ではあまり名の知れない画家に目配りしながら、日本のアール・ヌーヴォーの大衆的な広がりを示している（そごう美術館編『絵はがき芸術の愉しみ展——フィリップ・パロスコレクション』

ン・忘れられていた小さな絵』朝日新聞社、一九九二年、など。

文学の領域からは、木股知史が、『明星』とその周辺における文学と美術の共鳴をテーマに、複製技術への関心の高まりという当時の状況を仔細にたどりながら、文学におけるヴィジュアル化の促進について指摘している（『画文共鳴——『みだれ髪』から『月に吠える』へ』岩波書店、二〇〇八年）。さらに、大塚英志が、特に一条成美の挿絵類に注目し、『明星』をはじめとした文芸雑誌とその周辺におけるアール・ヌーヴォーを、「無名性」（大衆性）を帯びた担い手における近代的自我の芽生えという観点から捉え直し、その描写が少女まんがにおける表現につながる可能性を指摘している（『ミュシャから少女まんがへ——幻の画家・一条成美と明治のアール・ヌーヴォー』KADOKAWA、二〇一九年）。本展は、これらの研究をふまえながら、大塚氏の著書に沿う形で、文芸雑誌表紙絵と京都の図案教育におけるアール・ヌーヴォー調図像の流動性に注目し企画されたものである。このように、本展は、これらのアール・ヌーヴォー風図案が、いつ頃、どのような人々によって、どのように手がけられたのか、それらの図案は、どのようなプロセスを経て多様

な印刷物へと広がっていったのか、なぜ、それら印刷物の描き手／受け手は、これらアール・ヌーヴォー風図案を取り入れ／受け入れ、魅了されたのか、についてささやかな考察を試みるものであったが、この考察課題は「大衆文化研究」に照らすならば、次の三点において意義があると思われる。第一に、近代日本における印刷物で共有された最初の西欧由来のデザイン様式（流行としてのモード）であると考えられる点。第二に、印刷術・写真術という機械的複製技術による複製文化の勃興期において、多様な大衆的図像が共有した表現形式の一例と考えられる点。第三に、花や愛らしい女性のモチーフ、波打つような曲線による装飾性といったアール・ヌーヴォー風図案における諸要素が、竹久夢二らの抒情画などの大正期以降の大衆的図像へと引き継がれ変奏されていくと考えられる点。

これらのアール・ヌーヴォー風図案が大衆性を帯びつつ多様な印刷物に伝播した理由についてのさらなる考察が今後の課題ではあるが、それらの図案は、近代的自我の芽生えと絡み合いながら「洋風化」近代化や「新しさ」という意味合いを帯びることで流行と結びついたこと、比較的誰にでも模倣しやすく簡単に模様を作ることができる気安さをもなっ

たこと、琳派や浮世絵など近世期の日本の画像との親和性を帯びていたこと、などが考えられよう。さらに、明治後半期における複製文化の広がり、絵画の大衆化をもたらす一方で、一九〇七年の文部省美術展覧会開催に象徴されるような絵画の自律化とも結びついていた。こうした状況のなかでのアール・ヌーヴォー風図案の広がり、絵画・広告・挿絵などのメディアを横断した形での女性像の氾濫、生活の「芸術（デザイン）」化や美術における「生活」への関心の高まりという動きにも関連づけられると思われる。このような文脈を考慮しながら、文芸雑誌の表紙絵の動向についてさらなる検討を試みたいと考えている。

（国際日本文化研究センター特任助教）

一 山梨俊夫「絵はがきの語ること——絵画の大衆化の波のなかで」、『さこう美術館編『絵はがき芸術の愉しみ展——フィリップ・パロスコレクション…忘れられていた小さな絵』朝日新聞社、一九九二年、二一—二二頁。

## ベトナムにおける日本学研究の現在

グエン・ヴァー・クイン・ニュー

日本とベトナムの間には政治体制の違いがあっても、友好関係を促進していく基礎、つまり市民レベルでの協力の基礎がある。そのような友好的な背景の中で、ベトナムでは日本語を勉強する人が増えており、さらに日本について調べたい、研究したい人も増えている。ベトナムの高等教育における高度な人材育成を実現させるための日本語学習を普及させることを目的として、近年の日本学研究の背景とこれからの課題について紹介していきたい。

### 【日本語学習者急増】

日本語教育の歴史については、近年の三〇年間、つまりベトナムドイモイ（一九八〇年）改革時代以降から日本語教育が大きく発展している。ベトナムにおける日本語学校、日本学科などが相次いで設立され、その結果、日本語学習者も急増している。以下では、ベトナムの日本語教育の歴史的な流れ、日本語学習への動機について、そして、ベトナムにおけ



る日本文化受容、日本学研究の主要な対象やその状況と現在の課題について紹介する。

その日本語教育発展には「官民」一緒になって、という形で、国立、私立・民間であるかという違いは関係なく、日本語学校は増えている。一九九一年にホーチミン市人文社会科学大学において、日本の協力により最初の日本語クラスが開講された。そしてその三年後、日本語学科が設立され、二〇一五年に日本語部になっている。同時に、大学だけではなく、中学校や高校でも、二〇〇四年からモデル校において日本語教育がスタートした。さらに、この中学校、高校で日本語教育を実施するために、日本語教師を育てる必要があったので、二〇〇八年にはホーチミン市師範大学で日本語学科が設立され、それが今では日本語学部になっている。

その後、日本とベトナムの関係がますます発展してきた影響で、日本語教育もさらに発展してきた。ハノイ、ホーチミン市といった大都市圏だけではなく、地方にまでも日本語教育が波及しており、全国での日本語学習者が増えている。日本語は英語について第二の外国語になっている。二〇一五年の（独）国際交流基金の調査によれば、ベトナムにおける日本語学習者数は六万四八六三人で、二〇一二年時の

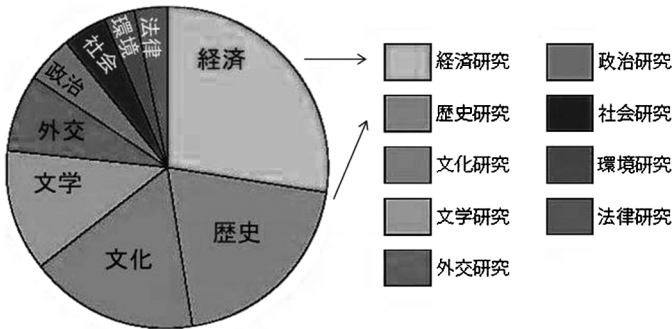
四万六七六二人と比べると三八・七%増加しており、世界でも八番目の数となっている【国際交流基金ホームページ日本語教育国・地域別情報】。中等教育（中学、高校）レベルでは、日本語は正規の第一外国語になっている。更に、二〇一六年期「二〇二〇年期国家外国語プロジェクト」のもとで、小学三年生からの日本語教育導入が開始された。近年、最適な学習環境を作るため、日本語教育に新しい日本語教育のマスタープランカリキュラム、シャドーイング学習などを導入されている。

では、なぜ、ベトナム人の若者たちは日本語学習にそんなに興味があるのだろうか。その理由としてはまず、いわゆるクール・ジャパンの影響が挙げられる。アニメ、マンガ、音楽などの分野で日本の魅力的な文化が入ってきたことにより、日本語を勉強し、そして日本文化をより理解したいという人が増えている。国際化時代における現在のベトナムでは、特に日本とベトナムの関係が非常に密接になっていることを反映して、日本のものなら何でも、と言ってもいいくらい、伝統から現代までの文化などにますます興味を持たれ、取り入れられるようになっていく。そして日本の現代的な文学作品、例えば、村上春樹や、よしもとばなななどの世界的

な人気作品が、ベトナム語でも翻訳・出版された。日本のポップカルチャーの受容が、日本文学への興味と密接に関連しているのではないか、という仮説も生じるのだ。

【日本シンポジウム多発】

一九七五年以前は、ベトナム戦争の影響により、ベトナムでは日本研究がほとんど行われていなかった。ベトナム北部では、日本文学の翻訳・研究があったが少なかった。一九七六年から一九九二年まで、日本文学者がベトナムの研究所（社会科学研究所、漢喃研究所、東アジア研究所、世界政治経済研究所等）を訪問し、ベトナムにおける日本研究を促進させた。日本語を話せるベトナム人学者が日本研究への関心を高めさせた。これはベトナムにおける日本研究の最初の段階と言える。そして、一九九三年から二〇〇三年まで、日本人の学者が相次いでベトナムを訪問したり、ベトナムの大学が日本学教育を紹介・導入したりして、日本への関心が高まった。ベトナム政府は外交上の理由もあり日本研究を重視した。その結果、いくつかの研究所が設立された。中でも重要なのが、日本の協力で一九九三年九月一三日に、ハノイで開設された日本研究センターである。



分野別の日本研究者数

ファン・ハイ・リン「新時代におけるベトナムの日本研究」世界の日本研究 2014（ハノイ）

そして、日本の各財団、国際交流基金、大学等との協力及び支援により、ベトナムでは、日本研究セミナーが定期的に行われ、日本研究促進に貢献している。一九九四年、ホーチミン市国家大学人文社会科学大学で東洋学部日本学科、そして、一九九五年、ハノイ大学東洋学部日本学科が設立された。その後、二〇〇九年からホーチミン市人文社会科学大学において日本に関するシンポジウムが相次いで行われ、同大学は日本研究の拠点として評価されている。分野別に見ると、最も盛んな分野は日本経済のようである。

ドイモイ以降、ホーチミン市人文社会科学大学では日本に関する国際的なシンポジウムを数多く開催してきた。主に経済や歴史に注目して日本を研究しているハノイとは違って、ホーチミン市を含むベトナム南部では日越関係及び日本文学に関するシンポジウムが多く行われてきたという傾向がある。ホーチミン市国家大学人文社会科学大学は、南部唯一の日本研究の拠点として、日本関連学術シンポジウムを盛んに行っている。

二〇〇九年 沼野充義「日本文学セミナー」『源氏物語』か

ら村上春樹、村上世代まで

二〇一〇年「日本と漢字文化圏諸国（ベトナム・中国・韓国）の文学における近代化」

二〇一一年「一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての日本ベトナムの「文明開花」の比較研究

二〇一二年「日本とメコン川地域―歴史的回り」

二〇一三年「越日関係四〇年の成果と展望」

二〇一五年「日本語教育国際シンポジウム」（於、ホーチミン市師範大学日本語学部）

二〇一六年「近世期日越関係史」

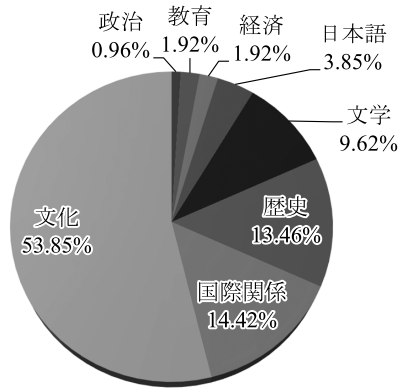
二〇一八年「越日関係四五年の成果と展望」

二〇一九年「日越俳句交流会」

二〇一九年「明治維新とベトナムドイモイ（革新）」

【日本語教育における日本研究の位置づけと今後のあり方】

ビジネスに役立つ実利的な日本語教育が偏重される中、学術的な日本研究は一体どのようになってしまふのかと懸念している。日本語教育と日本研究の連携、日本語を習得した若手の学者や研究者を日本研究の分野に取り込んで行くことは、日本語教育への関心が高まっているベトナムでは有効な



2018 学年度 日本学部学生の研究テーマ

手段となるだろう。一方、高度人材の育成、経済発展への貢献も重要である。日本研究者や教員ではなく、若者である学生は日本について何に関心を持っているのか、何を研究したいのかについて調べてみた。まず、二〇一八年の学年度のホーチミン市人文社会科学大学日本学部の学生について調べたが、学生達の研究テーマは多岐にわたっている。

具体的には、下記のテーマへの研究関心があるようだ。

- ・ 政治…日本の鎖国、明治維新
- ・ 文化…和紙、お土産、妖怪、温泉、おもてなし
- ・ 社会…祭り、家庭内暴力、ベトナム人留学生
- ・ 教育…現代社会の子供教育、漢字の役割
- ・ 文学…源氏物語におけるものの哀れ、俳句、文学翻訳、文学の現代化

研究分野の割合では文化・社会が一番多い。次に、国際関係、歴史、文学などである。ベトナムの中でも発展していて活発なホーチミン市の姿を反映してか、文化と社会に多くの学生が興味を持っているようだ。

#### 【「一般市民のための日本学の研究」困難点や期待】

日本語学習者が急速に増え、日本研究への関心も高まっている現在、より実践的な日本文化・文学を更に探究・発展・飛躍させるためには、日本文学研究は不可欠である。人文社会科学分野で日本を研究対象としている学者や研究者が出てくるが、日本語を理解し、日本語の文献・資料に基づいて日本研究を行っている者は非常に少ない。また、ベトナムにおける日本研究の課題としては、日本語のできる人材や日本語文献の不足が挙げられる。研究分野によっては、日本語によ

る研究が今後増えると期待している。今までベトナムの日本研究は、日本（国際交流基金、各民間財団など）から客員教授派遣、ベトナム人の訪日研究、日本語文献の提供、日本文学作品翻訳・出版支援などという形で支援を受けてきた。ただ、日本語文献が非常に不足している上に、日本語教材が効果的に使用・開発されていないため、ベトナムにおける日本教育・研究はまだ不十分・不確実な状況であると考える。

さらに、高度人材の育成及び社会に出てから役に立つ知識を教えるという「有益な」、「実利」教育が支配的な現在の日本語教育形態の中で、学術的な日本研究が充実することを願っている。国内外の発展状況の変化に直接的な影響を受けるベトナムにおいて、日本語教育・日本学は今後どのように展開されているだろうか。また、日本経済、日本史、日越歴史関係などの研究が多いと感じるが、伝統的な価値がある古典文学に対して、一般市民がもっと親近感を持つようになっ

#### 【まとめ】

グローバル化の進展に伴い、日本学が世界に普及している中、日本語学習者が急速に増えているベトナムでの専門的な

日本語教育・日本学の研究が更に探究・発展・飛躍されることを願っている。日本語を理解し、日本語の文献や日本に関する新たな教育・研究情報に接触することができ、研究を行うことのできる研究者が今後求められている。社会に出てから実際に役に立つことが重視され、「有益」で、「実利的」な教育が支配的な現在のベトナムの日本語教育において、利益追求でない、専門的な日本学の研究を充実化することが必要である。特に日本学に焦点して、日越比較研究を強化させ、学術交流を積極的に進めれば、ベトナムにおける日本研究者を育てることもできると考える。

（ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学講師／  
国際日本文化研究センター外来研究員）

「思煩之時」—— 礼儀作法の歴史を文書から研究する  
意義について

マルクス・リュッターマン

日常茶飯事、衣食住の細々な作法から倫理、法律などに至

るまで、規範が行動や良心に作用する。学問では伝統の賛美、同一感、誇り、規範的で思想的なリゴリズムを目指さず、飽くまでも知的的好奇心に答える思索を心得るので、礼儀作法をどのように研究するか、一例でもって確認したい。

『禮記』を始め、宋・唐時代の多くの立成・書儀でも端的に明示されるように、作法には社会秩序を中心とする思想の根源的な意義が寄せられている。『禮記』（第一巻、曲禮）の名言「人に礼ありては即ち安ず。礼無くんば危うし」というように人類の普遍的な礼儀作法はさらに合理化・概念化されてきた。中国諸国・朝鮮半島・日本列島の礼思想の徹底は周知のこと。文通は礼儀の域に離れがたく結びついている。主な史料を文書（もんじょ）といい、ある見方に寄れば現代の電子メールとの共通点もあるが、もっぱら機能論的には妥当だと思われる。だが、もちろん文書にあって電子メールにない要素もまた多々ある。

例えば、守覚法親王（一二〇二年没）が三條禪門と忠親公なる者に尋ね、書状を認める作法に関する諸説を集め、御記に止めた。『消息耳底秘抄』という。後世の手に渡って、秘すべき記録として伝授された。嘉禎三年付の書写の後書きによれば、六月の異例に涼しい二三日にて霖雨が一〇日ほど続

いたところ筆を擱いた。暗い空の年月は実に永く、耳底にして口外しない特権的な教養階層の罅を漏れなかったとはいえ、近世に入って有名な『群書類従』に収まり、言わば江戸時代の新風の空のもとで蒙が啓けた。文書模範の伝来とは別に、『消息耳底秘抄』は最も古いと思われる日本語による書札規範の書である。手紙の宛て方、仰せ書き聞き取りの習い、女房への文で覚えるべきことなど、諸説の拘りや、細かくても包括性に欠ける条目を見れば、特権的に利用を許された公家さんは果たして安心して参考に入れられただろうか。

Charles Darwin 著 *The Origin of Species* の第三巻で議する *struggle for existence*（生存競争）を広く、生命の最善および悩みの無い心地を狙う営みとして捉えなおせば、文化に通じるところの見解がある。人間の生存を保証する多岐にわたる戦略と戦術を例えて、農地「開発」(culture)、「都市化」(civilization)、「文化」、「文明」などと称する。つまり耕し、共同体、文字などの比喩を借りて、飢え、乱れ、無学などによる苦悩を乗り切る各種の行いをいう。生存の苦勞をめぐって生き物が言わば本能的に進化する過程を自然 (nature) とするのに対して、知能的で、認識的に進化する過程を文化と位置付ける。なお、動物の行動学では表象分析が展開してきた

結果、学習の能力の多段階も認め、カルチャーとネイチャーの間をナーチャー (nurture、育成の各条件の作用) と称して、軍配を先天か学習意識かに上げることを決めかねる域のネーミングも導入された。

いずれにしても、医療、天文、資源開発、エネルギー対策などを科学に加えても、そのどれも人間の認識論に答えて文化的行為と見なす。生存の有様を苦悩から解放して、無悩へ案内する術を見出す試行錯誤の全体を省みるのが文化科学の役目。外的自然 (日照、地震、台風など) と内的自然 (利害衝突、強制、戦いなど) とも接してきた経緯を学習の歴史として捉える観点から諸要素が文化学の研究域に属する。道徳や法律などの規範と同様に政治、美術、法律、物理、思想、文学などのあらゆる学問も運動源を苦悩から得て、方向性は安楽無苦の想定から得ると言えるかも知れない。礼儀作法もまた例外ではない。そしてコミュニケーションも生存及び安楽化の試行として意識の進化に作用した。先述の秘抄類は日本語史料の伝授、故実、文書に反映している学習歴の遺産であり、人類文化に貴重な経験を資している。文化研究は人類の試行錯誤や、それへの日本史料の提供している情報を無変の構造として把握するか。かえって行動進化を遂げるほ

どの方向性も認められるだろうか。

なお、学問的な好奇心といえは心理学や精神分析に代表される観点がある。ジグムント・フロイト著 *Das Unbewusste in der Kultur* (『文化についての違和感』) では人の煩惱が募る一方、欲望を昇華する多々の状況があることを文化問題として描写している。文化は緊張と拮抗に満ちたもので、利害をめぐって葛藤しあう人間は、個人的にも心内で葛藤し、違和感 (ウンベハーゲン) を覚える所以をいう。とりわけ欲しくても、満足を先送り、延期によるご褒美を相待つ姿に近代人の文化性を見出したという見解である。ノルベルト・エリアスはこのような心理学で発した考えを歴史社会学の文脈で受け、著名な文明論を提示した (*Über den Prozeß der Zivilisation*、『文明化の過程』)。絶対主義の宮廷やギルドなどの場のマナーを分析して、中世社会での露骨で生々しい風勢が独特な交際の条件のもとで長期に渡って洗練された。そして人々の多くはその品を抑えさせられ、欲望の抑圧を余儀なくさせられたという。ハンカチの発祥、食卓の道具普及、異性との接し方、服装の変容、幅広くこのような過程で近代人は品性に伴う標準を無意識に受容継承していると。平穩を保証する働きもあれば、返って暴力および苦悩の因果にもなるとみ

る。図らずもコントロールが効かなくなり露骨な欲望や無骨さ若しくは実力行使が勃発するや、あるいは欲しい心を抑えられても、罪意識や内面的緊張感若しくは違和感が精神に多大な負担をかけていると結ぶ。

エリアスのエチケット変遷論は西洋史にのみ位置づけられ、文明的な作法を生み出す長期過程説以外の精神的なコントロール形成や羞恥心の有様が視野に入ってこなかった所から、歴史学や民俗学を中心に諸方から議論・批判も招いた。しかし作法及び欲望の抑えなどに関する心性形成史そのものは広く比較に値する。思うに、古来の文通（書札）も言動心性を検討する対象であろう。表現や、比喩、送付の作法、書式などに関する規範化、聞き取りなどの立ち振る舞いの歴史学は史料の豊かさに恵まれている。エチケットを分析し、なおかつ他言語圏と比較する条件はかなり揃っている。

『書札礼「付故實」』も父子で代々に伝わった、いわゆる秘本だ。内々の家の宝、故實とされたものながら、近世にいたって、結局『群書類従』の第九巻にて公刊された。この編集は誰のものははっきりしない。湯治の合間で、舊草を閲覧し、餘閑をつかって纏めたというので、かなり余裕に恵まれたと思われる。ところで、後世の洞院実夏（一三六七年

没）なるものがこの編集書<sup>四</sup>をみて、ごく限られた空間と時間の借り出しで返却刻が迫って、競<sup>二</sup>寸陰<sup>一</sup>（すんいんときそいて）書いたと言う。言い訳でなければ、マナーを巡る情報がいかに入手しにくいさまであったか伺える。後書きによれば「可<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>収<sup>二</sup>箱底<sup>一</sup>」（はこのそこにおさしむべ）き「秘書」<sup>四</sup>として伝来し、そもそも知り得る人は少ない。「外見堅固可<sup>レ</sup>憚<sup>二</sup>々々<sup>一</sup>」（がいけんけんこにはばかるべしはばかるべし）と言う。笠松宏至も指摘したように、例外的に公家の間で『弘安礼節』のような申し合わせもあり、公共の芽生えはなかったと言えない。しかし、中世の夕暮れまでは家格の体系が頭丈で、故実の普遍化はなかなか展開しなかった。礼儀作法の大部分は故実の専有権及び支配権力への奉仕によって閉鎖されたからである。このような礼儀規範の閉鎖性はいかにも社会に必要な礼儀の一般性や普遍性と拮抗した歴史も注目に値する。

右で述べた伝授の空気の中では宛て書きについて不安が蔓延。人類の書簡文化と共通するのだが、例えば日本語の中世史料ではいわゆる上所が問題になった。氏名職名に「進上」・「謹上」・「謹々上」のどれを被せるかで、敬意の度合いが決まる。尊大、尾籠、艶、上品などの形容の中で差出人が演技



をして、多くは失敗や不安に陥った。『書札礼「付故實」』の条目では正誤に峻別しようとしても、判断でき兼ねる躊躇いを「思煩之時」と呼ぶ。大禮を右側に、無禮を左側にして、もともと安心を保証する筈であった思想の大義でも、逆に良し悪しの差別は悩み、不安となることがよく伝わっている。別書『書札作法書』でもこの事情を「書札煩ハシキ」とことと称している。やはり、人類文化の進化中、千年余りの伝授に秘められてきた「煩わしさ」という心性について議論したいものだ。

(国際日本文化研究センター教授)

- 一 共同研究『『かのように』という原理で形成してきた文通—『文書』概念や、その様式、記号、表象、意図性』(Formation and Changes of Correspondence—Texts as Seen in the Principle of 'As If—Transpositions: The Term Monjo, Its Styles, Signs, Representations, and Intentions) の紹介。
- 二 日本ではよく『文明への不満』と訳される。一九三〇年刊。
- 三 一九三〇年刊。
- 四 藏人・職事の文書を司る規定や模範が主な趣旨内容。源通具(一一七〇—一二二七)の名も見られるので、平安時代にかかり遡る規範が伺えると思われる。

「多文化間交渉における〈あいだ〉の研究」(通称  
〈あいだ〉研究会) レポート

村 中 由美子

二〇一六年四月から二〇一八年八月にかけて、共同研究会「多文化間交渉における〈あいだ〉の研究」が開催された。筆者は、二〇一六年四月から日本学術振興会特別研究員(PD)として日文研に所属することになったため、この研究会に参加させていただく幸運に恵まれた。本研究会は、二〇一三年から二〇一六年にかけて稲賀繁美氏の主催で行われた「海賊史観における世界の再構築」で俎上に載せられた問題系を継承するものであり、〈あいだ〉研究会からしか参加していない筆者は本研究会レポートの執筆者として甚だ不十分ではあるが、三年間の研究会が結実した論集『映しと移ろい——文化伝播の器と蝕変の実相』(花鳥社、二〇一九年)にも触れつつ、本研究会のレポートとさせていただきます。

一 多彩な参加者を通して繰り広げられる化学反応  
私事で恐縮だが、筆者は二〇〇九年九月から二〇一六年四

月までベルギーとフランスに留学しており、研究会参加のタ  
イミングはフランスで博士論文を提出した直後であった。言  
うまでもなく彼の地においてフランス文学は「国文学」であ  
り、フランスの大学のなかでもとりわけ国文学研究機関とい  
う色合いの強いパリ第四（ソルボンヌ）大学で論文を提出し  
た（大学統合により、現在では第四という数字は消えて単に  
「ソルボンヌ大学」と呼ばれる）。六時間の口頭試問を経て無  
事に論文は受理されたが、審査員の一人であったパリの名  
誉教授の言葉が今でも脳裏に焼き付いている。筆者の論文は、  
作家マルグリット・ユルスナール（一九〇三—一九八七）が  
とくに戦間期に執筆した作品群を、「秩序への回帰」と呼ば  
れる当時のフランスの芸術潮流に位置付けようとする試みで  
あった。ところが、日本人が「ネオ・クラシズム」という  
問題を扱うことに対して、ヨーロッパの古典もわかっていな  
い外国人には分不相応だと言わんばかりだったのである。ユ  
ルスナールは日本に関するテキストも書いているのにどうし  
てそちらのテーマを選ばないのかと皮肉まじりに問われ、他  
意はなかったのかもしれないがフランスを代表する教育・研  
究機関の排外主義的な一側面をひしひしと感じた。

このような過程を経た筆者は、恐れ多くも、日文研もし

かしたらパリ第四大学の日本版、つまり国粹主義的かつ排他  
主義的なのではないかというイメージを持っていた。日本研  
究を志す外国人研究者が筆者のような思いをしているのでは  
ないかと危惧し、そういう人がいたら相談に乗ってあげよう  
などと不遜にも思いつつ、戦々恐々と初回の研究会に参加し  
た。その不安が杞憂に終わったのは言うまでもない。

本研究会は、各年度の前半に集中して行なわれ、そこには  
毎回二〇名ほどの参加者が日本全国および海外から集結し  
た。「文学研究」という枠のなかでこれまで研究を続けてき  
た筆者にとって、多士濟々な顔ぶれというのが、まずこの研  
究会の一番の魅力であった。論文集『映しと移ろい』の執筆  
者は総勢四三名にもほぼる。専門は美学、美術・芸術史学か  
ら社会学、教育学、科学哲学、宗教学、比較文学まで実に  
様々であり、美術館の学芸員や陶芸家もいらっしやる。へあ  
いだ」というテーマをめぐって毎回広範な議論が繰り広げら  
れるため、ついてゆくのも一苦労だったが、各人の発表のあ  
とに稲賀氏のコメントを拜聴できるのがこの研究会の醍醐味  
のひとつだったように思う。論点が整理され、それらの点が  
どのように展開されるかという道筋の数々が提示され、縦  
横無尽に話が広がり稲賀氏の博覧強記ぶりに圧倒されつつ

も、頭のなかで活性化されて帰途につくのが常であった。勤務先大学で教育や校務を行いながら、同時に自分自身の研究を進めるのは至難の業であるが、年度の前半、月に一度でも京都の稲賀氏の研究会に集って多様な参加者たちと接することで、研究のベクトルを失わずにすることができている。

## 二 能動でも受動でもない、中動態——数々の研究発表のなから

本務先の授業と重なることもあり限られた回しか参加できなかったものの、そのなかでもとりわけ印象に残っているのが「中動態」をめぐる二〇一六年の第五回研究会である。ゲストスピーカーの森田亜紀氏は、倉敷芸術科学大学でかつて教鞭を取られており、実技として芸術を志す学生たちを間近で見守ってこられたそうだ。そのような中で目にされてきたひとつの作品が出来上がるということ、中動態の概念を通してお話しくださった。制作者が「つくる」(能動)のではなく、なにかが「つくられる」(受動)のでもなく、そこに作品が「現れる」のである。稲賀氏は、外科手術がとりわけうまくいっているときに医者がメスを動かしているのではなく、くなくなものに「動かされている」感じがするらしいという

例や、ご自身の合気道のご経験を踏まえて補足して下さったように記憶している。論文の執筆が首尾よく進んでいるときや(減多にない)、オーケストラで奏者が一体となって同じ方向に向かって演奏を進めてゆくときの、なにもものに動かされているような、でもその力が何であるかはわからないあの感覚、それがサンスクリットや古代ギリシア語、ラテン語に見出される中動態につながるということに目が開かれる思いであった。そしてその態は、フランス語やドイツ語の再帰動詞(代名動詞)にその名残が見られるし、日本語でも「山が見える」と言う。なぜ中動態に惹かれたのかという点、実際のな理由があったのも事実である。その年、筆者は東京都内の、世界のあらゆる言語を学ぶことのできる大学で、アラビア語や中国語を専攻する学生たちに第二・第三外国語としてフランス語を教えていた。代名動詞は教えるににくい。動詞の活用になじみのない学生にとってはそれだけでも一苦勞なのに、なぜ再帰代名詞までくっついてくるのか?筆者は、中動態の概念を学生たちに滔々と披瀝した。彼らは一様にぽかんとした表情をしていたが、ことばの勉強を続けるなかで、言語の体系のなかに人間の営みのありようが刻まれたこの一例をいつか思い出してくれたらと願う。

また、この中動態は様々な広がりを持つ。稲賀氏は、論集第六部のエピグラフでハンナ・アレントに言及している。アレントが「犯罪に〈仕方なく同意する〉態度を、強要された暴力への屈服ではなく、同意の〈意志〉表明だとする判断を示した」ことに対して、稲賀氏は「彼女は意志と責任によって構築されるべき社会正義（ないし神学的理論としての善）の理想を手放さないがために、敢えて〈不本意な同意〉（という曖昧で「無責任な態度」）を、犯罪行為から免責しなかったのではないか」と述べている。この〈不本意な同意〉とはまさに中動態的な態度である。責任を「取る」でもなく責任を「負う」でもないその〈あいだ〉、白黒つけることなく中立的な立場で物事を判断することは中動態的であると言えそうだ。フランス語の名詞 *complice* は、主人と客人の両方を示す。主人と客人は逆の関係だが、主人である人もときには客人になるし、客人だった人が主人になることもある。二項対立として考えている二つの要素が、「主客転倒」という言葉もあるように、ひっくり返ったり、実は対立した二項ではなかったり、補充し合ったりするような場合も考えられる。

### 三 「翻訳」について——筑波大学での研究会 (EASJ、E—ロツパ日本研究協会) に参加

では、翻訳の場合はどうだろうか。『映しと移ろい』第六部で、片岡真伊氏はアンガス・ウィルソンのみだ英訳版『細雪』最後の二行から「能動・受動の二元論を越える契機」、つまり「〈中動態〉ともいふべき様相」を浮き彫りにしている。彼女の論考は以下のように始まる…「ある小説が異なる言語に翻訳されるとき、翻訳の原典はどのように映され、また移植先の言語へと移ろうのだろうか。そしてある作家が、その小説の翻訳に触れる時、作家はいかなる要素に発想源を見出すのだろうか。」第二次世界大戦後、英語圏において川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫といった日本人作家の著作が次々と英訳出版された。イギリスの作家、アンガス・ウィルソンは英訳された『細雪』の最後の二文に、西洋の小説には見られない滑稽さを読み取り、行き詰まりを迎えていた西洋的な小説の型を打破する契機をそこに見出した。ところが、ウィルソンの読んだエドワード・G・サイデンステッカーによる英訳では、その部分において主語の取り違えがある上、小説中の和歌を一行空けた上で改行し、さらにイタリックで記すという原文とは異なる表記が取られていた。

ウィルソンが『細雪』に読み取った、西洋の小説にはない「異質性」とは、翻訳の過程で生じた原文との差異に立脚したものであったということ、片岡氏は説得的に論証している。本稿から、翻訳という事象を研究対象とする際、元のテクストと、翻訳されたテクストのみではなく、そのへあいだで、すなわち翻訳中に起こっていることにも注意を向けなければならぬという重要な示唆を得ることができた。

この研究会が出発点となり、片岡氏、ゴウランガ・チャロン・ブラダン氏（日文研機関研究員）と筆者でパネルを組織し、二〇一九年九月一四日から二日間に渡って開催された第三回 EALS 日本会議で発表を行った。パネルのタイトルは「翻訳を通して日本文学を読む——世界文学としての日本文学への三つの視座」であり、ディスカッサントとして稲賀氏にもご登壇いただいた。明治時代から第二次世界大戦後にかけて、日本文学がどのように紹介、受容されたかという問題、またその作品の翻訳の過程や、受入地での文化的背景に応じて受容にどのような影響があったか等について、ゴウランガ氏が『方丈記』の受容とバジル・バンティング作“Chomei at Toyama”を、村中がアーサー・ウェイリー訳『源氏物語』のマルグリット・ユルスナールとヴァージニア・ウルフにお

ける受容を、片岡氏が『細雪』英訳出版におけるタイトル変遷の過程を題材に論じた。それぞれの発表を通じて翻訳をめぐる諸問題が浮かび上がり、今後さらにそれらの検討を進めるつもりである。

〈あいだ〉研究会によって、このように専門領域の異なる個々の研究者の〈あいだ〉がつながり、それを契機にあらたな〈あいだ〉が生み出されようとしている。前述のフランス人名誉教授に、ぜひこの研究会のことを報告したい。

（白百合女子大学講師／

国際日本文化研究センター二〇一九年度共同研究員）

（一）本レポートの執筆後、二〇二〇年二月一六日から一七日にかけてとりまとめ研究会、また初日に花鳥社の編集者である大久保康雄氏をお迎えして論集の出版記念会が行なわれ、盛況であったことを追記する（二〇二〇年二月一八日記）。

日文研 六十四号

二〇二〇(令和二)年三月三十一日発行

編集 倉本一宏、呉座勇一

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ファックス (〇七五) 三三五―二〇九一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



**NICHIBUNKEN**